

41617

教科書文庫

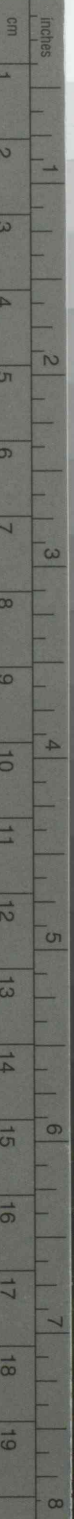
4
810
41-1938
2000301577

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



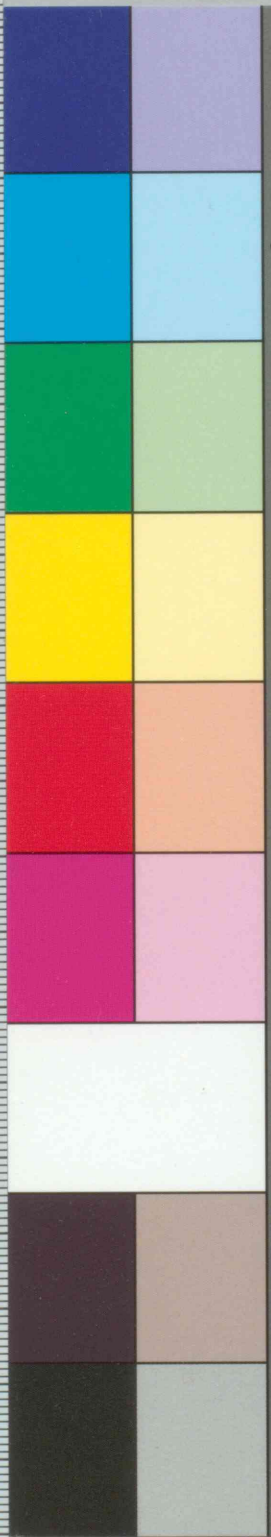
© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



31759
Iq1
資料室



紙山園語讀本

改訂版

卷五



3259
I91

資料室

濟定檢省部文

文科文漢語國校學中 日五月二年三十和昭
用科語國校學業實 日五月二年三十和昭

文學部 五訂版 力編

現代國語讀本

早稻田書局出版



(照參 築建と景風)

門明陽宮照東



日光東照宮は、元和二年徳川秀忠が、家康の願即ち東照權現宮を日光山輪王寺の境内に造營したのに始まり、寛永元年家光が其の改修に着手し、同十三年に至つて落成した。それが今の別格官幣社東照宮である。家光の改修によつて廟の規模が著しく擴大されたが、工事は精緻を極め、妙技を凝くし、その輪奐の美は古今無比と稱せられて、「日光を見ざれば結構を云ふなし」と云ふ諺をさへ生んだ。造營の奉行は松平左衛門大夫正綱と秋元但馬守泰朝で、大棟梁は甲良宗廣であつた。

陽明門は腰屋根のない三間一戸の樓門で、入母屋造、四方軒唐破風である。門の左右から廻廊を出して、内院を包んでゐる。俗に「日暮らしの御門」と呼ばれ、東照宮の中でも特に華美を賦はれてゐる部分である。

東照宮、陽明門

卷五 目次

一	春の動き	長塚節	一
二	伊藤仁齋の舊居古義堂 その一	市島春城	七
三	伊藤仁齋の舊居古義堂 その二	市島春城	一三
四	朝(詩)		一九
	雀	北原白秋	
	朝なり	蒲原有明	
五	仕事の邪魔		二四

六	春と夏(俳句).....	諸	家.....	二六
七	心の關守.....	柴田鳩翁.....	三〇	
八	銀の皿 その一.....	黒岩涙香據.....	四	
九	銀の皿 その二.....	黒岩涙香據.....	四	
一〇	櫻と松と燈火.....	松平定信.....	五	
一一	舟路(詩).....	島崎藤村.....	五	
一二	蘭學事始.....	杉田玄白.....	六	
一三	郵便切手と玩具.....	内田魯庵.....	六	
一四	兩國橋.....	石川雅望.....	七	
一五	風景と建築.....	渡邊十千郎(據).....	七	

一六	西湖の美觀.....	佐々木指月.....	九	
一七	松下村塾.....	徳富蘇峯.....	九	
一八	刑前の書.....	吉田松陰.....	一〇	
一九	天徳寺琵琶に泣く.....	湯淺常山.....	一〇	
二〇	武藏坊(川柳).....	誹風柳多留.....	一〇	
二一	輕井澤二日.....	正宗白鳥.....	一〇	
二二	火災と地震.....	鴨 長 明.....	一三	
二三	夕雲雀(和歌).....	近世歌人.....	一七	
二四	日本の眞珠.....	川村多實(據).....	一三	
二五	坦庵と象山.....	坪内逍遙.....	一三	

二六 忠僕と二將軍……………小笠原長生(據)…一五

二七 秋霧……………北畠親房……………一六

二八 日本民族論……………白鳥庫吉(據)…一六

二九 曙光(詩)……………西條八十……………一八〇



純正國語讀本卷五

一 春の動き

長塚節ながつか せつ
 歌人、小説家
 茨城縣の人
 大正四年歿
 年三十七

騰騰

長塚節

春は空からも、土からも微かに動く。毎日の様に、西から埃を巻いて来るはやてが、どうかするとはたと止つて、空際にはふは／＼して綿の様に白い雲が、ほつかりと暖かい日光を浴びようとして、僅かに立騰つたといふ様に、じつと動かずにゐる事がある。水に近い濕つた土が、暖かい日光を念ふ一杯に吸つて、その勢づいた土の微かな刺戟を根に感じさせると、田圃の榛げんの木のぢみな蕾は、目に立たぬ間に少しづつ伸びて、ひら／＼と動き易くなる。その刺戟から、蛙はまだ蟄居の状態にありながら、稀にはそつちでも、こつ

一 春の動き

ちでも、くゝくゝと鳴き出す事がある。空から射す日光はそろそろと熱度を増して、土はそれをいくらでも吸つて止まない。土はすべてをだんくくと刺戟して、堀のほとりには蘆や、芝や、その他の草が空と相映じて、すつきりとその首を擡げる。軟かさに満たされた空氣を更に鈍くする様に、榛の木の花はひらくと止まず動きながら、煤の様な花粉を撒き散らしてゐる。蛙は假死の状態から離れて、軟かな草の上に手を突いては、驚いた様な様子をして空を仰いで見る。さうして彼等はあわてた様に聲を放つて、その長い睡眠から復活した事を空に向つて告げる。それで遠く聞く時には、彼等の騒がしい聲は、唯空にのみ響いて快げである。



長 塚 節

彼等は更に、春の到つた事を一切の生物に向つて促す。草や木

蠶(蚕)

が心附いて、その活力を存分に發揮するのを見ないうちには、鳴く事を止めまいと力める。田圃の榛の木は疾うに花を捨てて、自分から先に、嫩葉の姿になつて見せる。黄色みを含んだ嫩葉が、爽かな朝日を浴びて快い光を保ちながら、蒼空の下にまだためらつてゐる周囲の林を見る。岬の様な形になつてゐる水田を抱へて、周囲の林は漸くその本性のまに、勝手に白つぼいのや、赤つぼいのや、黄色つぼいのや、種々に茂つて、それが氣が附いた時に、急いで一つの深い緑になるのである。雑木林のそこらこゝらに散在してゐる開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い瞳を聚めて羞しさうに葉の間から、こつそり四方をのぞく。雑木林の間には、また芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。その麥や芒の下に居を求め、雲雀が時々空を占めて、「春がふけた」と呼びかける。さうすると、その同族の聲のみが空間を支配してゐるべきは

磬—盤

ずだと思つてゐる蛙は、その轉る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛越え、鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中のみ、これを仰げばまばゆさに堪へぬ様に、その身を遙かに煌く日の光の中に没して、その小さい喉のちぎれるまでは、激しく鳴らさうとするのである。蛙は愈益、鳴き誇つて、樫の木のような大きな常磐木の古葉をも一時にからりと落さねば止むまいとする。

この時、すべての樹木や、それから冬季の間にはぐつたりと地に著いてゐたすべての雑草が爪立して、唯空へ空へと暖かな光を求

新地は、
いさよふか
善ちりい
の地くま
ひりまを
石地は
さうは
落し
心
木
十

絲—糸



(筆 鳳 栖 内 竹) 蛙

めて止まぬ。土がそれをじつと引きとめて放さない。それで一切の草木は、土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と並行する事を好んでゐた人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して、銘々に手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しい時、蛙は一齊に、裂けるかと思ふ程喉の袋を膨脹させて、身を撼かしながら殊更に鳴きたてる。白い絨絲の様な雨は、水が田に満ちるまでは、注いでまた注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生れて來た蛙は、刈株を引返し、働いてゐる人の周圍から足下から逼つて、敏捷にその手を動かせ、と促して止まぬ。蛙がぴつたりと聲を吞む時には、日中の暖かさにも

ぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。更にひっそりと静かな夜になると、蛙はいかに自分の聲が遠く且遙かに響くかを誇る様に、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲はめつきり遠くく隔つて、それがぐつたりと疲れた耳をくすぐつて、百姓のすべてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡する事によつて、百姓は皆短い時間に肉體の消耗を恢復する。彼等が雨戸の隙間から通す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外へ出ると、今更の様に耳に迫る蛙の聲にその覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を呼返すのである。草木は遠く遙かに響けと鳴くその聲に揺られつゝ、夜の中に成長する。櫟くわくや檜ひのきや、その他の雜木は、蛙が鳴けば鳴く程、さうしてそれが鳴きやむ季節までは、いくらでも繁茂する事を繼續しようとする。其所には、毛蟲やその他のあさましい損害が或はあるにしても、しとくと屢しばしば梢を打つ雨が

涼(涼)

空の蒼さを移したかと思ふ様に、力強い緑が地上を掩うて、爽かな涼しい蔭を作るのである。

〔土〕

二 伊藤仁齋の舊居古義堂その一

市 島 春 城

市島春城
早稻田大學名譽
理事
名は謙吉
新潟の人
萬延元年生
一代の儒宗

徂徠も仁齋には
一目をおいた。

伊藤仁齋は一代の儒宗である。彼れは義理堅い人で徳が高く、學問が深く、加ふるに獨創の見識があつて、一世の尊崇を受け、其の大名はあまねく遠近の學徒を引きつけて、日本國中、門人の無かつたのは、飛驒の山中と佐渡、壹岐の二島だけであつたと云はれる。荻生徂徠はあの通りの傲岸な學者であつたが、彼れすら仁齋には一目をおいて、京都から江戸へ來る人のある毎に、先づ仁齋の評判を聞くのを常としたさうである。また彼れの門人太宰春臺は其の師を仁齋に比較し、師の仁齋に及ばぬ事が三つあると云つて、仁

仁齋はまことに偉大な醇儒であり、大儒であり、君子儒であった。

齋の學問が獨學で師傅によらぬ事、仁齋が終生仕へなかつた事、及び東涯、蘭嶋のやうな偉い子を持つて居る事を舉げて居る。仁齋はまことに偉大な醇儒であり、大儒であり、そして君子儒であつた。



その爲めでもあらう、彼れの子孫は連綿として今日に榮えて居る。又その居宅も、火災などの非常時には官府の保護を受けた事もあつたといふことで、今なほ立派に保存されて居る。

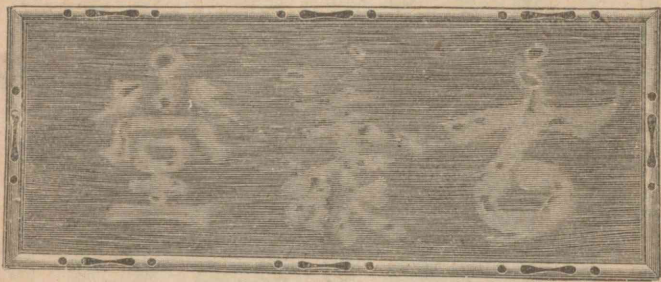
そして其の居宅は質素ながらも奥ゆかしいものであるが、いつぞやの訪問の思出を、左にざつと掻い摘んで見る。

仁齋の舊宅は、京都の東堀河出水南と云ふ所にある。家の前に

は、一帯の小川がある。浅いながら氣持よく澄んだ流れて、川底の小石が一つ／＼讀まれる位であるが、これが即ち堀河で、學派の名ともなり、また仁齋の長子東涯の雅號をも生んだのであつた。門の前には「伊藤仁齋舊址」と刻んだ石標が建つて居る。

刺を通ずると、直ちに二階の客間に通された。手狭ではあるが、さつぱりした品のよい室で、床には仁齋先生の短冊の幅を掛け、長押には末男蘭嶋の篆字の額と、古義堂の板額とが掛けてある。床の上には、博物館にでも行かねば見られぬやうな古風な時計が据ゑ置かれ、柱には目盛のある柱隠し式の時計があつて、これには分銅が下がつて居る。さすがに古風な趣があつて、いかにも面白い。やがて座が定まると、自分は先づ伊藤家の系圖の一覽を請うた。それによると、伊藤家の祖先は道慶と云つて、天正四年四月廿八日歿とあるから、織豊時代の人である。道慶から數年を経て、七右衛

仁齋東涯の餘德遺薰の然らしむる所であらう。



古 義 堂 額

門長勝といふ人があつた。これが仁齋の父である。現在の伊藤家は仁齋から八代目であるといふが、天正以來、よくも同じ所に住んで立派に家格を維持して來たもので、これも一つは仁齋東涯等の餘德遺薰の然らしむるところであらう。
伊藤家が泉州から京都へ移る時に、家普請の費用として、抹茶茶碗に黄金を盛つて携へて來たといふ言傳がある。自分は次ぎに之れについて尋ねた。主人の答によると伊藤家にもやはり同じ言傳があるさうで、今も、青磁の茶碗一個が、其の時の記念として傳はつて居るといふことである。自分はまた、伊藤家が火

一札之事

一火事の義に付
自、御公儀様、被
仰出、候條々、不
奉、得、貴意、候向
後他處火事の刻親
類縁者又は無據
方へ見舞に参り候
外無用の者火事場
へ見物に参間敷候
尤も右の節面々火
の用心可仕候何も
常々家内並借屋等
へ可申開候仍て
爲、後日、一札如
件、
寶永四年丁亥
卯月十三日
東堀川四丁目
源 藏
重 藏

一札之事

一火事、
向は徳文火事、
おは、
何、
仍、
卯月十三日
源 藏
重 藏

災に逢はれたことがあるかと尋ねた。主人の答によると、伊藤家が火事の不幸に逢つたことは度々で、仁齋の在世中にも已に一度逢つて居り、其の後も一兩度逢つたといふことである。が、しかし大體仁齋當時のまゝで今日に傳はつて居るのは珍しいことである。
火災の話に因んで、主人が、火事についての記念の書きものが、あそこにありますから御覽下さい。」と云つて、二階の上り段の一方を指ざされた。見ると、火災の折に於ける家族の心得として、東涯の書いた和文の一書で、それが額になつて居るた和文の一書であつた。その文意は近所に火災があつても、家を明けて出掛

けてはならぬと戒めたので、多分前年の火災に苦い経験を嘗めた結果の訓戒であらう。仁齋の家は昔から京都の名物の一つであったので、或る大火の折などは、之れを焼かすまいとして、官邊で特に警護したこともあつた。仁齋が存生中以來二三度も火災に見舞はれたに拘らず、彼れの稿本を始め、東涯、蘭嶋の著述などが、澤山立派に保存されてゐるのは、幸ひにして、土藏が火災を免れたためであると言ふことである。

かやうな話をして後、主人は何か取り出しに座を起つて土藏へ行かれた。自分は目送しながら起つて見廻すと、成程庭の隅に一字の土藏が見える。これが仁齋以來の貴重な書類什器を焼かず、に保存した殊勳の建物かと頷きながら見て居ると、主人はやがて多くの幅類や二三の箱を携へて出て來られた。そして先づ示されたのは東涯が逸話を留めた三味線匣であつた。見れば長方形

貴重な書類什器
を焼かすに保存
した殊勳の建物
かと頷きながら
見て居る。

の古色蒼然たる杉箱で、外側に鐵製の錠のある、極めて質朴なものである。その逸話といふはかうで、東涯が或る時、古道具屋から書類を入れるつもりで此の匣を買つて來た。すると誰れかが、これは三味線匣で、士君子の手にすべきものではないと云つたので、東涯は眞面目に、

「三味線の様な尺の長いものが、どうしてこれに入るものか。」と云つたといふ話である。世事に迂濶なこの道學の先生が、三味線に繼竿つぎきのあることを知らないのであつた。

三 伊藤仁齋の舊居古義堂 その二

市 島 春 城

さて此の名代の三味線匣から何が出るかと、固唾カタツバを呑んで見て居ると、期待の通り、果たして仁齋手澤ニサイテタクの珍しい品々があらはれた。

六十餘州の學徒が、皆此の古色蒼然たる羽織に、御目に懸かつたのであらう。

筆硯である。枕である。肱衝である。扇子である。それらが後から／＼と出る中に、最も珍しく感じたのは、仁齋の着古した羽織であつた。それは黒絹の三つ紋で、紋は木瓜の中に巴を入れてある。頗る大形のもので、丈は甚だ短く、殊に襟幅が圖外れに廣く、仕立方が大分今日のと違つて居る。そしてあちこち破れを綴つたところもあつて、仁齋先生儉素の面影を留めて居る。察するに先生は、これをば講義の時などに着用されたのであらう。飛驒、佐渡、壹岐を除く六十餘州の學徒が、皆此の古色蒼然たる羽織に、恭しく御目に懸かつたのであらう。赤穂義士の大石良雄も、此の古羽織に相應はしく装はれた老儒を仰いで、その諄々たる講釋に聞き入つたことであらう。

玉手匣の内容を一々説明するのは煩はしいから省くが、要するに質素一點張りのものばかりである。枕の如きは、木片に多少刀

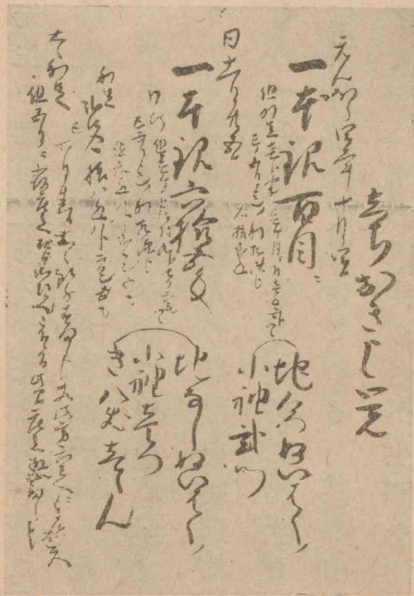
風流趣味などの微塵も無い。

を入れた迄のもので、頭の觸れる所にも布地すら張つてはなく、其の上もう材が大分朽ちて居た。硯も日本石の粗材で造つたもので、風流趣味などの微塵も無いものであつた。しかしこゝに古學先生の面目があるのだと思へば、この質素無風流その物が、却つて敬虔の念を起こさせる種子にもなる。

此の遺什を見終はつて後に示されたものは、二冊の門人録であつた。一冊は糊入の反故を裏返しにして、横綴の帳面風に仕立てたもので、仁齋の自筆で、表紙に「諸生初見帳」と大書し、其の側に、延寶九年正月某日と書いてある。其の中には、此の大儒を慕つて來た例の六十餘州の學徒の名が、生國を添へて無數に列記されてあるのであるが、匆卒の際、殘念ながら一々讀むことが出来なかつた。

最後に、此の門人録と共に示されたのは、一冊の記録であつた。それは表紙も表題もない一巻無名の小冊子であるが、これこそ仁

齋の涙をとどめた悲劇喜劇の祕録である。筆者たる仁齋が最も軽く見たもので、しかも或意味からは最も重大な史的、情的、裏面的、趣味的の価値を持つて居るものである。これは仁齋が自筆で一



仁齋の覺帳

家の内事を書き留めたもので、今こそ史料として人にも示すが、昔は親しい門人と雖も見ることの出来ぬものであつた。その中で殊に珍しいのは、

「質置申候覺」

仁齋が不如意時代の消息を、赤裸々に、雄辯に語つて居る。

と云ふ表題の下に纏められた部分で、それには衣類などを典物にした、其の品名や利子の計算などが細々と書き記されて、仁齋が不如意時代の消息を、赤裸々に、また雄辯に語つて居る。仁齋は終生

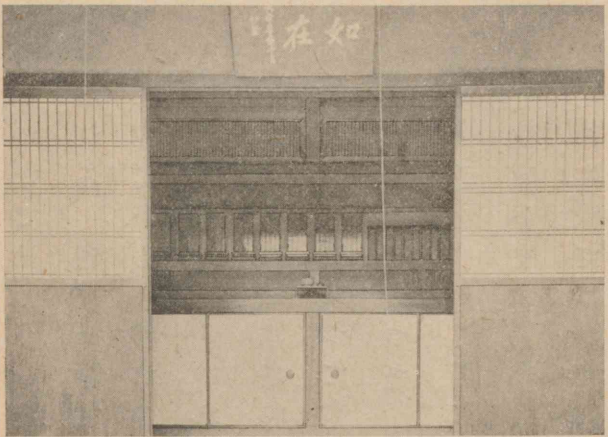
仕へなかつた。幾ら父祖の遺産があつたにしても、決して裕福では無かつたであらう。その氣の毒な消息は、此の「質置申候覺」でよく窺はれる。名高い話ではあるが、仁齋が貧しかつた頃のある年の暮の事である。彼れの困難な内政は正月の餅を調へることすらも許さなかつた。けれども、彼れが道に進む勇猛心は、いさゝかも之れが爲めに煩はされずに、端然として机上の書に向つて居る處へ、憚るやうに入つて来て、そつと彼れの側らに坐つたのが、夫人である。夫人は云つた。

「私は貧乏を少しも苦には致しません、が、原藏(東涯)の事が可哀さうで御座います。今日も、あれが「何處のお家でも皆おかちんを搗くのに、家ではばかり、何故つかないか。」と申して、むづかります。教へても、叱つても承知致しません。どう致しませうか。」

と云つた。仁齋は書物に向けた目を、しばしつぶつて考へてゐた

此の無名、無表紙の小冊子は、此の偉大な學者の魂をゑぐつた、貴重な祕密を囁いて居るのである。

怪僻矯激の行ひをして、時習に悖ることを喜ばなかつた。



仁齋の舊宅の廟

が、やがて着てゐた羽織をぬいで、黙つて夫人に渡した。さうして再び其の眼を書物に注いだ。……此の無名、無表紙の小冊子は、此の偉大な學者の魂をゑぐつた、かやうな貴重な祕密を囁いて居るのである。

仁齋は、貧に居つても當時の漢學者が概ね爲した様に、決して怪僻矯激の行ひをして、時習に悖ることを喜ばなかつた。立春の前夜の豆撒などは、兒戯に齊しい習慣のやうではあるが、仁齋は古禮であるからと云つて、必ず禮服を着けて此の式を行つた。そして家人の「福は内鬼は外」と叫ぶのを謹聽したといふ

ことである。

仁齋は好んで和歌を詠じた。現に伊藤家で見た書冊の内に、「和歌愚艸」と題した、自筆の歌集があつたが、いかにも流麗典雅の筆で三十一文字を書いて居る。あのやうな大儒に和歌の嗜みがあつたのも、床しく、その假名書きの美しいのは、更におくゆかしいものであつた。

偉人の舊居や遺品は誰れのも多大の教訓を與へる。けれども仁齋の如く、しめやかな、穩かな、貴い、そして切實な教訓を與へるのは、めつたにあるまい。

流麗典雅の筆。

四朝

春近くなんぬるか、

北原 白秋

一つ啼き、
二つ啼き、
啼き出づるもの
あり。

よろづ角ぐむ緑に
今朝早うむせびて、
一つ啼き、
二つ啼き、
啼き出づるものあり。
今朝早う堰かれて、
満ち、溢るゝものあり。
靄深く立ちこめし野川に、
今朝はやう目ざめて、
羽ばたき起さるものあり。
今朝まだし暗きに
飛び立ち、光るものあり。

雀

留まりもあへぬ
雀の、
一羽雀の、
揺られては、
ちち、
吹かれては、
ちち、

いや高く、
さむくと、まだ、
揺れのこる孟宗の秀の、
あはれ、その秀に、
留まりもあへぬ雀の、
一羽雀の、
揺られては、ちち、
吹かれては、ちち、
いづれは散りゆく日あしの
今は冬——すぐに雨なり。

朝なり

蒲原有明

朝なり。やがて川筋は
ほのじらめども、夜の胞を
運び徘徊るくゞもりに、
市場に列ぶ土藏の
壁もおほめく川の靄。

明方の河岸のけしきは動き出で

朝なり。やがて明方の
河岸のけしきは動き出で、
堀江づたひに差す潮の
きざし早くも催せば、
逆押し上す濁り水。

滅えもなづめる朝靄の絶間を群れて鷗鳥。

見よ、流るゝは瓜の皮、
核子、塵藁柿屑。
滅えもなづめる朝靄の
絶間を群れて鷗鳥、
何を求るか飛び交ふ。

水は濁れど、蛇の

文にうごめき、——緑練り、
瑠璃の端ひかり、碧よどみ、
揚場の杖にまつはりて、
蜿り色めき溢れくる。

青物車いくつ。——はた、

繁き營みの、人の生映す濁川。

稼ぎの人等。——乞巧の空手。——魚荷の押送。——さては荷足の脚重く竿さし上る船夫。

朝なり。繁き營みの人の生映す濁川。朝なり。河岸の土藏もかゞやき出でぬ。——今日もまたかくて鬨くるわが想。

『春鳥集』

五 仕事の邪魔

檜葉の生牆を刈つて居たところへ、御客が見えた。

「何をして御いでですか？」

「生牆を刈つてみました。」

「さうですか。御骨が折れますなあ。」

「左様なら」と云つて、歸つて行つた。

苺をもいで居るところへ、御客が見えた。

「何をやつておいでですか？」

「苺をもいでゐます。」

「綺麗ですねえ。毎日こんなに取れるんですか。御樂みですねえ。」

「まあ縁側におかけなさい。」

ルビーの一塊を鹽で洗つて、砂糖をかけて振舞つた。

ルビーの一塊を鹽で洗つて、砂糖をかけて振舞つた。

「左様なら。どうも御馳走さま。」

千葉縣の習志野の近邊に院内といふ所がある。そこに昔、治右衛門といふ奇人が住んで居た。

治右衛門が生墻を結つて居る所へ、村の者が来て、

「治右衛門さん、何をしてござる。」

と尋ねた。治右衛門は

「井戸を掘つてゐるんだよ。」

と答へた。

「なんだ、井戸掘りだつて？ 生墻結ひをしていらつしやるんぢやありませんか。」

「そんなに知つてゐるなら、聞くに及ばないだらう。」

世の中に治右衛門は少ない。村の者が多い。而

世の中に治右衛門は少ない。村の者が多い。而して解りきつ

た事を繰り返して、治右衛門が仕事の邪魔をする。

して解り切つた事を繰り返して、治右衛門が仕事の邪魔をする。

海老が言つた「海が餘り狭いから、おれは始終曲つて居る。」

蟹が言つた、世間が思ふやうになるならば、おれは横に歩きはせぬ。思ふやうにならぬのが世の中だ。」

海老にも蟹にも理想がある。而して其の理想の大いなるに對しては、天地も狭いもののやうに思つて居る。海老にも蟹にも短所がある。而してその短所の醜い癖をば、世間が悪い爲め仕方な

短所の醜い癖をば、世間が悪い爲め仕方な事の妥協だと思つてゐる。

さの妥協だと思つてゐる。海老や蟹は取りも直さず、吾々人間である。

〔野草集〕

六 春と夏

元日や見るとも富士の山
 元日や一羽の鶯 富士の山
 美しい此の國が若くて美しい日の出がある

青々

東海に此の國ありて初日の出
 二三年見ぬ間の紙魚や方丈記

露月
石井氏、秋田縣の人(明治六年—昭和三年)

露月

春泥や嘴を淨めて枝に鳥
 露涼し夜と別る、花の様

月斗

青木新護、大阪の人(明治十二年—)

乙字

大須賀績、福島縣の人(明治十四年—大正九年)

奈良一日寒き佛と梅の花
 夕立や夜宮の町の宵の程
 番蜂の巢をめぐりをる風日かな

落雷の光海に牧場一目かな

飄亭

此の年もした、か雑煮参りけり
 水かへて金魚目さむるばかりなり

繞石

全紙へ一字老師の吉書龍躍る
 祭更けぬ軒提灯の或は消え

左衛門

白梅に下駄よごしたる畑かな
 雲岫を出でて日かける青田かな

露石

松間たどり來て磯の明るさ春の潮
 天日悲し明治の御宇の夏つくる

露石
水落庄兵衛、大阪の人(明治五年—大正八年)

左衛門
吉野太左衛門、東京の人(明治十年—大正九年)

繞石
大谷正信、高根縣の人、英文學者(明治八年—)

飄亭
五百木良三、松山に生る(明治三年—昭和十二年)

亞浪

白田卯一郎、長野縣の人（明治十二年）

亞浪

木より木に通へる風の春淺き
日かげ無き暑さに堪へて歩むなり

紫影

藤井乙男、淡路に生る、文學博士（明治元年）

紫影

揚雲雀五柳先生門を出づ
こまぐと砂吹きあぐる清水かな

七 心の關守

柴田 鳩翁

「何事も則をこえゆく世の人の心にかたき關守もがな」古は國に關をすゑて守りの人をつけ、往來の人をあらため、其の仔細なき者はこれを通し、仔細ある者はこれを止めて都に告ぐる、いはゆる美濃の國には不破の關、攝津の國には須磨の關、或ひは逢坂、または木幡など、是れなり。今此の歌の意義は、人常におそれ敬むの心

柴田鳩翁
江戸の心學者
名は亨
京都の人
天保十五年歿
年五十七

人の道を失ひまするは、唯だおれがの身最負身勝手より起るもの、たゞ心にしつかり敬み畏るゝ所があれば、人の道がつとまります。

を存して私欲を拒ぐことは、猶ほ關を守りて旅人を留むるが如く、其の善惡を知らまほしとなり。然らざれば私欲常に本心をくらまして、人の道を遠ざかること多からむと、うち歎きたるさまなり。關守の譬喩甚だ有難いことぢや。これ則ち明德を明らかにするの手段、日新の工夫でござります。されば銘々どもが人の道を失ひまするは、唯だおれがの身最負身勝手より起るもの、たゞ心にしつかり敬み畏るゝところがあれば、人の道がつとまります。さすれば心は大切の關所ぢや。こゝで油斷を致してうかくすと、どの様な惡事を思ひ付かうやら、甚だ怖いものぢや。これについて恐ろしい話がござります。

ところは江戸の神田邊と聞いたが、名は何とやら申して、至つて貧乏な暮らし方、夫婦に子供三人、亭主といふは三十四五、女房は二十八九、家は九尺二間の裏店鼠の巢を見る様な住居、商賣は何と取

江戸中を大根大根と泣きあるく。

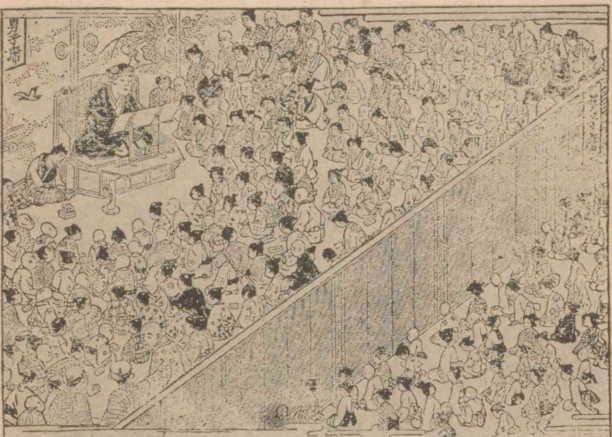
米買へ、酒買へ、醬油買へ、油買へ。

こんな咄はお子達も。

り定めたこともなう、朝は朝寝し、夜は夜ふかし、針を藏に積んでもたまらぬ身持ゆゑ、とう／＼貧乏の底になつて、せうことなしに青物賣と出かけ、四五百文の錢で親子五人が其の日暮らし、朝五百文で、土物店ぢものだんで大根を買うて、其の日一日江戸中を大根々と泣きあるいて、暮方に七百文ばかりにし、内へ戻ると、米買へ、酒買へ、醬油買へ、油買へ、薪買へ、子供の鼻藥まで、二百の錢で明日一日の軍用金、残つた五百は即ち明日の商賣の元手、一日休むと一日食はずに居ねばならぬ、小ぜはしない身代、其の中から無理無體に雨が降るというては半日休み、頭痛がするというては、晝から歸るといふなまけかた、親子五人が食はずに居ることも、折々あると聞きました。こんな咄は御子たちも、よう聞いてお置きなさるが宜しい。是れはこれちひさい時に、父さまや母さまのおつしやる事を聞かんだ報いで、成人して此のやうな罰があたつて、難儀な暮らしをせねば

日ざしを見れば、はや晝過ぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中にはまだ一文の錢もたまらず。

此の大根が暮方までに七百文の錢に化けぬと、忽ち明日は釜の中に蜘蛛の巢がはる。



心學道話の模様

ならぬ。隨分御兩親の仰しやる事を、よう聞かねばなりませぬ。さて彼の大根賣が、例の通り、一荷の大根を荷ひ、朝早うから賣りあるいた所が、どうしたことやら其の日は一把の大根も賣れぬ。日ざしを見れば、はや晝過ぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中にはまだ一文の錢もたまらず。これはつまらぬ、此の大根が暮方までに七百文の錢に化けぬと、忽ち明日は釜の中に蜘蛛の巢がはる、どうしたらよからうと工夫しながら、いつの間にかやら兩國橋を渡り、本庄の屋敷町を大根々と賣りあるいた。ある屋敷の表長屋の窓の内から、コレ大根屋と

先づ知行にあり付いた。

呼ぶ。ヤレうれしや先づ知行にあり付いたと、呼ぶ所を見れば表御門から右へ三つ目のむしこ窓の内から呼んだのぢや。そこで大根屋が表御門から荷をになひ込んでお長屋へ廻つて見ると、門から三軒目の高塀のうち、門口には何某と標札が打つてある。荷を持ち込んで見れば、縁さきの障子をあげ、旦那殿が今月代を剃られたと見えて、鏡立に向うて自分髪を結ひながら、その大根はいくらぢやといふ。百に三把で御座いますといへば、それは高い、廿四文づつにしておけといはるゝ。賣りたさは賣りたけれども、現在の損の立つことなれば、どうぞ三把に御買ひなされて下されい、今朝から江戸中を泣きあるいて、まだ一把も賣りませぬ、どうでも賣つて歸らねばならぬ大根、掛直は一切申しませぬといふ。かのお侍がかぶり振り、それでも高い、まからずば先づよしにせう、邪魔ながら持つて歸れと云ひ捨て、縁先の障子をはたと閉められた。大

損が立つ。

心の關所が油斷なく番してゐたら、銅盥に目はつかぬ筈ぢや。

根屋もいろ／＼というて見ても、かの侍が相手にならぬ。そこで仕様もやうもなく、ハテ詰らぬ、もう日の入るに間もなし、なんでも四五百の錢を持つてかへらぬと、親子五人の、明日の命が繋かれぬ、何としたものであらうと、手を組んで思案をしながら、縁前の銅盥かねだらひにふつと目が付いた。こゝが大事の聞き所ぢや。心の關所が油斷なく番してゐたら、銅盥に目はつかぬ筈ぢや。そこでかの大根賣が、縁さきの障子は閉めてある、あたりに見る人はなし、かの銅盥を水の入つたまゝで、大根二三把の下へ、そつとかくす。怖いものぢや、今まで廣かつた世界が立ちどころに狭うなつて五尺の身體をしばらくもおくことがならぬ。そこで荷をかつぎ出して、門口を出ようとすると、障子の内から、これ大根屋と呼びかけられる。ぬからぬ顔で「まかりませぬ」といふと、「いや／＼直はねぎるまい、其の大根買はう。」と云ひざま、障子をさらりと明けられた。大根屋も

百千萬の後悔も
今になつては間
に合はず。

びっくりしたが、どうぞして逃げて往なうと思ひ、何把ほど入りま
する、はした賣は出来ませぬ」と云ふ。「いや、はしたでは買はぬ、
其の大根皆買はう、此の縁さきへならべて呉れ」といはれる。サア
大根屋も一生懸命障子のしまつてゐるうちなら、銅盥の出しやう
もあらうに、今さら銅盥が出されもせず、というて賣るまいとも云
はれず、逃げ行かうにも、荷を捨て、歸つてはならず、百千萬の後悔
も今になつては間に合はず、うろ／＼としてゐると、かのお侍が大
根屋の顔をキツと見て、われはきつううろたへてゐるぞよ、先づ銅
盥から出して、大根の數をかぞへて見よ」といはる。大根屋は惣
身に冷汗を流して、もう切られるか、ぶたれるかと、わな／＼ふるへ
ながら、銅盥を恥かしさうにソツと出して、土に手をつき、旦那様眞
平御免なされて下されませ。何を隠しませう、先刻も申しまする
通り、今朝からまだ一文の商も致しませず、此のまゝ歸りますると、

心の洗ひやうも
ありさうなもの
ぢや。無禮は咎
めぬ、此の銅盥
を遣はず、持つ

明日親子五人が食べますることがなりませぬ。悲しい貧の盗み
根性、面目次第も御座りませぬ。六つを頭に子供が三人、どうぞ親
子五人が命を御助けなされて下さりませ」と色青ざめて、土に頭を
すり付けて詫言する。かのお侍思ひの外氣立のよい人で、更に立
腹のけしきも見えず、いや／＼其の詫言に及ばぬ。まづ大根の數
をよんで見よ」と云はる。怖々ながら大根を縁に積み上げた所
が、二十三把。かのお侍、やがて七百六十四文の錢を取り出だし、か
の大根賣を呼んで、サア其方がいふ通りに二十三把、七百六十四文、
序に銅盥を添へて遣はず。貧の盗みとは云ひながら、われが根性
は餘程よごれて居ると見える。此の銅盥は顔や手足を洗ふ道具
なれど、たゞ顔手足を洗ふばかりではあるまい、心の洗ひやうもあ
りさうなものぢや。無禮は咎めぬ、此の銅盥を遣はず、持つて歸つ
てとっくりと思案をし、心の垢を洗ひ落せ」と云ひ捨て、障子をし

て歸つてとつくりと思索をし、心の垢を洗ひ落せ。

めて内へはひる。大根屋は夢見たやうに、有難いやら、恥かしいやら、禮も云はれず、詮方なさに銅盥と錢を荷の中へ入れて、早々にかの屋敷を逃げて出て、始めて生きたやうに覺えたが、恥かしいと思ふ心が、腹のうちに横たはつて鬱々と家に歸る。常ならば小歌うたひながら、門口を這入ると、荷籠を投げすて、錢財布を提げ、庭に立つて居ながら、まづ翌日の手配りぢや。百が米買へ、二十四文が薪を買へ、十六文が油買へと、子供の鼻薬から今夜の寢酒の肴まで、残る所も無う、でかし顔でさはいする所なれど、今日は何と申うてやら、いつにない門口をソツと這入り、しほく上り口に腰をかけて草鞋の紐を解かうともせず、物をも云はずさし俯いてゐる。女房は櫛まき頭に乳呑子を懷へねぢ込み、埃掃持たせたら、三寶荒神ともいふべき勢、一調子はり上げて、賣上の錢をも見せず、あやまつた狐殿のやうに、俯いてばかり、居ねむつてゐるのか、たゞしは食ひ

でかし顔でさはいする。

孟子

名は軻
周代鄒の人孔子
に私淑し亞聖と
稱せらる。

羞惡の心は義の
端なり。

酔うて戻つたのか。」と御託宣を上げて見ても、一言も返答せぬ。そこで女房が合點がゆかず、荷の中を見れば賣上の錢もそのまゝ、外に見なれぬ銅盥があるゆゑ、是れはこなたどこから持つて歸らつしやつた。こちの内には不似合な銅盥、顔つきと云ひ、銅盥と云ひ、何ぞわけが有りさうな。」とたくしかけて問ひ詰める。こゝで亭主も面目なげに、今日の始末をいちぶ始終話し、さて、其方が手前も面目ないと、始めて夢がさめて來た。これが是れ有難いものぢや、かのお侍が心を洗へと御意見の一言、大根賣の腹に横たはつたは、孟子のいはゆる羞惡の心は義の端なりと仰せられたもこれぢや。此の恥かしいと思ふは本心の發見、恥をさへ忘れねば、人は身の立つもの、幸に此の大根賣はよいお侍に出あうて、有り難い御意見に預つたので、本心に立ち戻られた。若し此の時に銅盥を盗みおぼせたら、段々盗みに面白味が付いて、始めに恐ろしいと思つた

お侍は觀音様ぢや、則ち刀尋段段壞の功德でござります。

仁者に敵なし。

のが、後には心よう覺えるやうになる。この大根賣も後には大盗人にもなり、首の座に直るやうになるのぢやけれど、かのお侍の御意見の聲が耳に入つて、立ち戻りが出来て見れば、首斬られる氣遣ひはない。これで見ればお侍は觀音様ぢや、則ち刀尋段々壞の功德でござります。洛東清水寺の御寶前にかけたる繪馬を見ますれば、罪人が縛られて、首の座に直つて、首をさしのべて居ると、其の後ろに太刀取が太刀をふり上げて居る。其の上の方に觀音様のお姿があらはれて、光明を放つてござると、太刀が段々に折れてある所が書いてある。これが刀尋段々壞の功德を書きあらはしたもので、皆心の事ぢや。心さへ正しければ刃向ふつるぎは無いものぢや。かるが故に仁者に敵なしとも申してある。されば此の大根賣も、これから女夫心を合はせ、本心になつて晝夜働き、終に三年目に相應の八百屋になつてはじめてかの銅盥を御侍の方へも

どし、厚う御禮を申して、此の御屋敷の御出入になりました。これが舊染の汚水を洗濯したと申すもので御座ります。ある人の歌に、

ふりにける奈良の都のならはしも

あらたまりゆく君が誠に

跡は明晩お話し申しませう。

〔鳩翁道話〕

八 銀の皿 その一

黒 岩 涙 香

僧正は僧侶の中での極めて高い身分である。この國當時の官制では、陸軍大將のすぐ次ぎに位する格式を持つて居た。今旅人が戸を開けて入つたのは、其の僧正なる人の家であつた。しかも十年前に此の地の寺領を預つて以來、ミリエル僧正といへば、殆ん

黒岩涙香
明治大正の操觚家
萬朝報社長
名は周六
土佐の人
大正九年歿
年五十九

ど慈善の神様のやうに思はれて居る。其の僧正の家であつた。

僧正は本年七十五歳になるが、家族としては自分より十年ほど年下の妹と、一人の老女とが居るだけである。彼れは始めて此の土地へ赴任した時、すぐに貧民病院を見廻つたが、其の建物の狭くむさくるしいのを見て、廣い立派な自分の官宅と取り替へた。三人だけの家族に何も廣い住居はいらぬから、それよりは多勢の貧しい病人にゆつくりさせたいといふ意見から出たのである。この一事でも大方其の人柄が察せられる。彼れは年々政府から一萬五千フランの俸給を得たが、其の中の一萬四千フランをば、年々悉く慈善事業に寄附し、自分はたゞ残りの一千フランと、妹の身に附いた所得の五百フランとで、極めて質素に暮らして居る。その後、それでは餘りひどいからといふ老女の苦情によつて、別に地方政廳から馬車代として一年三千フランを受ける事になつたが、此

の三千フランをも、すぐに悉く他の慈善事業に寄附することに取極めた。これからと云ふもの、土地の人がすつかり其の徳に感じて、恵み金の類をばすべて此の僧正の手に託することになつた。これがため、年々僧正の手を経る慈善の金額は實に夥しい高である。けれども授ける豊かな人よりは、どうしても受ける貧しい人の方が多いので、僧正の爲めになる金とては一錢もない。のみならず、時々分け與へるのに不足して、自分の乏しい家計をそれに廻す事がある。

僧正は凡そ人の難儀とあれば、どのやうな危難を冒しても之れを救ふ。この點では慈善家たるのみでなく、勇者である。けれども、僧正は世間一般の宗教家のやうに、決してやかましい意見を持つて居るのではない。僧正は本來由緒ある家に生まれ、華美と贅澤との中に育つた人で、たゞ革命の亂の爲めに家を失ひ、亂をイタ

凡そ人の難儀とあれば、どのやうな危難を冒しても之れを救ふ。この點では慈善家たるのみでなく、勇者である。けれども僧正は世間一般の宗教家のやう

に、決してやかましい意見を持つて居らぬ。

リヤへ避けて居るうちに、最愛の妻に死なれて、それがために世をはかなみ、發心して宗教に歸したのであつた。だから、僧正も若い時には、普通の俗人と同じやうな行をしたのであらう、多少は過ちもあつたであらう。それは自分でも常に云ふ事で、従つて人に説



僧正バヤンバヤルをなす

く意見も柔かて無理がなかつた。先づ、かうだ。「なんて人も人と云ふ者は、肉體と云ふ重い荷物を背負つて居るので、此の荷物が常に慾心や過ちのもととなるから、油斷なく之れを見張つて居ねばならぬ。出来るだけ

轉んで膝を突くのは仕方がないから、突いたらすぐに其の膝で神に縋るのだ。完全と云ふは神より外には無いので、人には望んでも及ばぬ事。人はたゞ正直にすればよい。

は之れを抑へ附け、之れに勝つやうにとめて、萬止むを得ぬ場合には之れに従ふがよい。従へば罪となるのだけれども、全く止むを得ぬ場合ならば許されるであらう。轉んで膝を突くのは仕方がないから、突いたらすぐに其の膝で神に縋るのだ。完全と云ふは神より外に無いので、人には望んでも及ばぬ事である。人はたゞ正直にすればよい。過つて罪を犯しても、たゞ正直を忘れるな。一生懸命に罪を少なくするやうに勉める、それが人の道だ。全く罪の無いのは神ばかりだ。罪といふは肉體に籠つて居る引力のやうなものだ。とかういふ風で、説き聞かせる事が一々人情をかみわけた優しい意見ばかり、これでは人の服するのも無理はない。この夜、僧正は夕方の散歩から歸つて、それから室に閉ぢ籠つて書きものをして居た。所へ、夜食の用意が出来たと見えて、老女が來て戸棚から銀製のソップ皿を出して行つた。ソップ皿が銀製

とは、此の平民主義の僧正に不似合のやうだけれども、これは先祖から傳はつた大事の寶物で、僧正には此の銀の皿でソップを吸ふのが、たゞ一つの贅澤なのである。皿は都合六枚の一組で、其の外に銀の燭臺が二つある。これも親類から形見として貰つたので、いつもストーヴの上の棚に、對にして揃へて置いて、客の有る時に用ゐて居る。

よく規律の立つた家だから、老女が皿を出しに来ると直ぐに食事だ。僧正はさうと知つて、書きものをやめて勝手へ行つた。それは食堂と玄關とを兼ねた室で、戸を明けると直ぐに往來だ。不都合な建方のやうだが、貧民病院を其のまゝ住居にして居るのだから、仕方がない。さて僧正が食堂へ行つたのは、丁度老女が僧正の妹に向つて、宵に買物に出た時、町で聞いて來たといふ恐ろしい旅人の話をして居た時であつた。

「それは何でも、十九年といふ長い間、懲役をして居た奴だと云ひますからね、今夜はきつと何所かへ入りまゐりますよ。町中みんな怖がつて、もう戸を締めて居ります。こちらでも、入口と戸棚の錠を早くかけなければなりません。銀の皿を盗まれては大變でございますからね。」

僧正はこれを聞きつゝ、テーブルに向つて坐つた。丁度此の時である、外から旅人が戸を叩いたのは、僧正の口からは直ちにお入りまゐりなさい。といふ返辭が出た。これは音なふ者のある毎に、誰れ彼れの差別なく、僧正の口から發せられる詞である。僧正の家には、祕密もなく都合といふものもない。難儀する人は救ひ、乞ふ人には與へる。財産についても全く自分と云ふ事を忘れて、我が住居を我が家とは思つてゐないのである。

返辭に應じて入口の戸は開かれた。見れば開いた人の顔に決

僧正の家には祕密もなく、都合といふものもない。難儀する人は救ひ、乞ふ人には與へる。

彼れは突如として入つて來た。……亂暴らしい顔は、一目見てぞつとするばかりである。

死の心が現はれて居る。こゝで救はれなければ救はれる所がないからである。彼れは突如として入つて來た。背には囊を負ひ、手には杖を持つて居る。そして其の野卑な、大膽な、疲勞した、そして亂暴らしい顔は、一目見てぞつとするばかりである。

九銀の皿 その二

黒岩 涙香

此の旅人こそ、全く其の筋から銘を打たれた前科の大悪者である。眞に恐るべき人間である。

燈火の前に立つた其の顔の凄さ、其の姿の恐ろしさ。之れを見て、老女も、僧正の妹も、逃げようとするが如く、我れ知らず立ち上つた。若し日頃僧正の感化を受けて居なかつたら、二人とも必ず叫聲を發したであらう。唯だ泰然として靜かなのは僧正である。

僧正の靜かな態度に恥ぢて、妹はすぐさま席に復して僧正の顔を凝視めた。老女は立つたまゝ、棒のやうになつて居る。やがて僧正は來客に向つて、穩かに其の顔を見つゝ、問はうとしたが、客は問はるゝを待たず、あわてたやうな高い調子で言つた。

「私はジャン・バルジャンと云ふ者です。懲役人です。十九年の間ツーロンの獄で懲役を勤め、四日前に牢から出されたばかりの者です。今日は朝から十二リーグ歩き、疲れ果てゝ此の土地に着いたけれども、飯を食ふ所も寝る所ありません。行く先先でみんな斷られ、仕方なしに此の家の外の石の上に寝て居ると、教會から出て來た婦人が、此の家の戸を叩いて見よと教へてくれました。それで叩いたのです。泊めてくれますか、くれませんか。此の家は宿屋ですか、何ですか。錢は、かう見えても持つて居るのですよ。十九年間牢の中で溜めた工賃が百〇九フ

リーグ
約四千八百米

フラン
三十八錢七厘

サンチーム
—
フランの百分の

ランと十五サンチーム、其の中から四日の旅で二十サンチーム使つただけです。宿賃は拂ひますが、泊めてくれるのですか、くれないのですか。」

彼れに取つて、この返辭が何よりも先に聞きたいのであつた。そして又も失望するのが厭だから、まづ第一に自分の履歷をさらけ出したのである。僧正は人を斷つた事がない。返辭せずとも分かつて居る。僧正は直ちに老女に向つて例の通り靜かに「さあ、皿を出しておくれ。」と云つた。この者の爲めに、もう膳立を命じたのである。彼れに取つては實に意外であつた。彼れはつかくと、更に燈火の近くに進んで言つた。

「お待ちなさい、お待ちなさい。今私の云つた事が分かりましたか。私は懲役人です、罪人です、牢から出されたばかりですよ。」
僧正はこれには取りあはず、又老女に向つて、

彼女は唯々として
—
次ぎの室に去
つた。

「新しい敷布を出して、寢床の用意もしておくれ。」
と命じた。僧正の言付には、一言も無く従ふ老女である。彼女は唯々として次ぎの室に去つた。僧正は始めてジャンバルジャンに向つた。

「さあ、あなた、こゝへ坐つておあがりなさい。丁度私共も是れから食事を始める所ですから、御一緒にいたゞきませう。」
何と云ふ丁寧な言葉であらう。しかもそれはわざとらしくなく自然である。ジャンバルジャンは、始めて泊めてくれる事と合點した。けれども、あなたなどと云はれるのは、彼れに取つて今まで覺えの無い事である。泊まる事の出來たのは無論嬉しく感ずるけれども、此の待遇が怪しい、合點が行かぬ、殆んど恐ろしい位だ。彼れは暫らくは、口もきけなかつた。何か云はうとしたけれども、吃つて語をなさないのである。

合點が行かぬ。

何だか燈火が暗いやうではないかといつた。

その中に老女は銀の皿を出して來た。ジャン・バルジャンは席に着いた。僧正は老女に向つて、何だか燈火が暗いやうではないか。といつた。これは銀の燭臺を持つて來いと的心であらう。老女が心得て去らうとすると、皿もこれでは足りないだらう。と言ひ足した。六枚を残らず出せといふ謎である。このやうに盛徳限り無き高僧でも、子供のやうな稚氣がある。尤も子供のやうな心だから、自然に其の徳が高くなるのであらうけれど、とにかく僧正は、この皿と燭臺とを客に見せるのを、日頃から一方ならず愉快に感じて居る様子である。ジャンバルジャンは既に「あなた」と呼ばれて、異様に心がとろけて居るところへ、更に斯様な取扱ひを受けたので、嬉しさ怪しさに、自分で自分がわからなくなつた。

「牧師さん。貴方は世間の人のやうに私を追拂ひもせず、銀の皿や銀の燭臺まで出して、私をお客扱ひにして下さる。私はもう、

何にも貴方には隠しませんよ。」

身の上話を始めようとするのであらう。僧正は遮るやうに、

「なに、何にも話すには及びません。この家は私の家ではなく、私は此の家の主人では無いのですから。」

「えゝ？」

「この家は誰れでも難儀をする人の泊まる家です。行き暮れて惱む人が、此の家の主人です。」

この言葉が若し心の底に浸みこまぬならば、それは人ではない、いや鬼ですらもあるまい。ジャンバルジャンは殆んど呆れた體である。僧正は更に語をついだ。

「貴方の名前も、聞かぬうちから分かつて居ます。」

「えゝ？ 聞かぬうちから？」

「はい、吾々の同胞兄弟と云ふのです。」

この家は私の家ではなく、私は此の家の主人では無いのです。この家は誰れでも難儀をする人の泊まる家です。行き暮れて惱む人が、此の家の主人です。

あゝ此の者を同胞兄弟といふ。僧正の心は神の心であつた。

(『噫無情』に據る)

一〇 櫻と松と燈火

松 平 定 信

松平定信

江戸時代好學の名君
白河藩主越中守
老中上座
樂翁と號す
文政十二年歿
年七十二

無きと聞けば有りといはまほしく、悪しきといふをば善きと事かへていはんこそ、いとねぢけたることなれ。櫻てふ花は、我が國のものなるを、唐國にもありとて、さまざま例など引きつくれど、櫻かいたるもろこしの畫もなく、かなへりと思ふ詩もなければ、無しとこそ言ふべけれ。いでや櫻と言はでしも、花とだにいへば、異木にはまぎれぬものを、ほのくくと明け行く山際、雲か雪かとばかり咲きみちたるも、霞こめたる夕まぐれ、花のけはひも、臙ろに見えて、こゝにのみ暮れ残す景色などいふは浅かりけり。まいて、夢の

びやかなれば、近劣りするなどいふは、彼のことかへて才おふ心にいふことなりかし。風に散りかふも、雨にぬるゝも、遠山に見るも、軒端にむかふも、明ぼのも、夕暮も、露のひるまも、目かるゝ時しなきを、ことに我が國ぶりの姿にて、枝もすなほに花のかたちもゆたかく、匂さへもこちたからぬも、あやしきまでにこそ覺ゆるものなれ。さるをいづこにもありと言ふは、さらなり、曙夕暮などとおもしろからんやうに言葉添ふるは、いまだ深くそめし心にはあらざりけり。すべて言葉もて言ひ盡くさんと思ふは、いと浅き心かな。

或る人の庭見しが、松の枝をため葉をすかし、一草一木皆作り立て、けり。まして石などは、様々の色あるをも、並べわけ、大なるも、小なるも、たゞずまひをかしくしなしたるを、翁ことに褒めにけり。歸りて後に、翁のつね好み給ふは、草は階前より立ちのび、松も檜原

すべて言葉もて言ひ盡くさんと思ふは、いと浅き心かな。

世の人我が好む
ところにあふも
のをばほめの
しり、心にあは
ぬものをば譏り
などすれと、理
盡くして思ふに
はあらず。

もおのが儘になしおき給ふかと思へば、今日の庭をば殊にほめ給ふはいかにと問ふ。「何もさせる理なし。世の人我が好むところにあふものをばほめのしり、心にあはぬものをば譏りなどすれど、理盡くして思ふにはあらず。茶たつること好むものは暮など



圍むものを見て惜しき月日を空しく
松し給ふ木野狐の名をわすれ給へりや
平などいへど、茶たつるも一時の心やり
定にて、よき悪しきいふべき品もなし。
信いで此の庭といへば、室町の頃の庭の
残れるを見ても知るべし、野山の景色

なすも、また假りにつくりなせしなり。實にさまざまの石など、おもしろかれと爲したるは、おもしろからぬやうもなし。翁が庭はといへば、おのが儘になすにて、古の庭などの意とも違へば、心高き

わけもなし。紅紫の色はよきとて賞しぬれど衣にして翁など着まほしとは思はざるなり。我が心に違へばそしるは、みな道理知らぬものすることや。

雲の上のやんごとなき君おはしましけり。その御子の、御かた

はらにま
しましけ
るが、外面
より風の
吹き来て、

木版花月草紙の面影

はらにま
しましけ
るが、外面
より風の
吹き来て、

けふはいとのどか
なり。いでやすみ
だかはらの花みん
と、小船のりて
行きたるが、花見
んとたち出るもろ
人のさま、げに都
のみやびを盡せ
り。

さやうなる言葉

ともしびの光定まらざりければ、人召して、風の吹き来るぞ。ともしびも消えなん。障子たてよ。といひ給ひければ、父君殊にいかり給ひて、さやうなる言葉遣ひしては、歌はいかでか讀むべき。とて、む

遣ひしては、歌
はいかでか讀む
べき。
ものを盡くして
いふべきものに
はあらず。

づかり給へば、御子いとおそれて退き給へり。御次に居たるもの、
いかゞしたる御教ぞと思ひて、御色うかゞひ問ひ奉りければ、「もの
を盡くしていふべきものにはあらず。」と宣ひしとぞ。

〔花月草紙〕

一一舟路

島崎藤村

島崎藤村
詩人、文學者
名は春樹
長野縣の人
明治五年生

海にして響く艫の聲、
水を撃つ音のよきかな。
大空に雲は飄ひ、
潮分けて舟は行くなり。
靜かなる空に透かして、
青波の深きを見れば、

緑なす草のかけ。

さながらに遠き
白帆は、群をな
す牧場の羊。

水底やはてもしられず、
流れ藻の浮きつ沈みつ。
緑なす草のかけより、
湧き出づる泉ならねど、
おのづから満ち來る汐は、
海原のうちに溢れぬ。
さながらに遠き白帆は、
群をなす牧場の羊、
吹き送る風に飼はれて、
わたつみの野邊を行くらむ。

雲行けば舟も随ひ、
舟行けば雲もまた追ふ、
空と水相合ふかなた、
諸共にけふの泊へ。

一二 蘭學事始

杉田 玄 白

杉田玄白
蘭學醫
文化十四年歿
年八十五
其の翌日
明和八年(二四
三)三月五日
骨が原で解剖の
あつた翌日
良澤
前野良澤
ターフル・アナ
トミア
オランダ語で解
剖圖譜の意「解

其の翌日、良澤が宅に集り前日のことを語り合ひ、先づ彼の「ターフル・アナトミア」の書にうち向かひしに、誠に艱難なき船の大海に乗り出せしが如く、茫洋として寄るべきなく、唯あきれにあきれて居たるまでなり。されども、良澤は豫てより此の事を心に掛け、長崎迄も行き、蘭語並びに章句語脈の間の事も少しは聞き覚え、聞き習ひし人といひ、齢も翁などよりは十年の長たりし老輩なれば、こ

體新書」の原本
翁
玄白

れを盟主と定め、先生とも仰ぐこととなしぬ。翁はいまだ二十五字さへ習はず、不意に思ひ立ちしことなれば、漸くに文字を覚え、彼の諸言をも習ひしことなり。 俎、此の書を読み、いかやうにして筆を立つべきかと談じ合ひし



杉 田 玄 白

に、とても初より内象の事は知れがたかるべし、此の書の最初に仰伏全象の圖あり。これは表部外象の事なり。其の名處は皆知れたることなれば、其の圖と説の符號を合はせ考ふることとは取りつきやすかるべし。圖の初とはいひ、かたゞ先づこれより筆を取り始むべしと定めたり。即ち解體新書形體名目

解體新書
我が國最初の西洋解剖學翻譯書
安永三年(二四三四)刊行

篇これなり。其の頃は、助語の類も何れが何やら心に落ちつきて辨へぬことゆゑ、少しづつは記憶せし語ありても、前後一向にわかぬ事ばかりなり。譬へば、肩といふものは目の上に生じたる毛なり。といふやうなる一句、彷彿として長き日の春の一日には明らかめられず。日暮るる迄考へ詰め、互ににらみ合ひて、僅か一二寸の文章、一行も解し得ざる程にてありしなり。

又或日、鼻の所にて、「フルヘッヘンド」せしものなりとあるに至りしに、此の語わからず。これは如何なる事にてあるべきと考へ合ひしに、いかにもせんやうなし。其の頃辭書といふものなし。やうやく長崎より良澤求め歸りし簡略なる一小冊ありしを見合はせたるに、「フルヘッヘンド」の譯註に、木の枝を斷ちたる跡、其の跡「フルヘッヘンド」をなし、又庭を掃除すれば、其の塵土聚り「フルヘッヘンド」といふやうに讀み出せり。これは如何なる意味なるべき

かと、又例の如くこじつけ考へ合ふに、辨へ兼ねたり。時に翁「思ふに、木の枝を斷りたる時癒ゆれば堆くなり、又掃除して塵土集ればこれも堆くなるなり。鼻は面中に在りて堆起せるものなれば、「フルヘッヘンド」は「堆」といふことなるべし。然れば此の語は「堆」と



前野良澤

譯しては如何。といひければ、各これを聞きて、甚だ尤なり、「堆」と譯さば適當すべしと決定せり。其時のうれしさ、何にたとへんかたもなく、連城の壁をも得し心地せり。

此の如き事にて、推して譯語を定めたり。其の數も次第次第に増しゆくこととなり、良澤のすでに覺え居し譯語書留をも増補しけるなり。其の中にも「シンネン」などいへる事出でしに至りては、一向に思慮の及びがたきことも

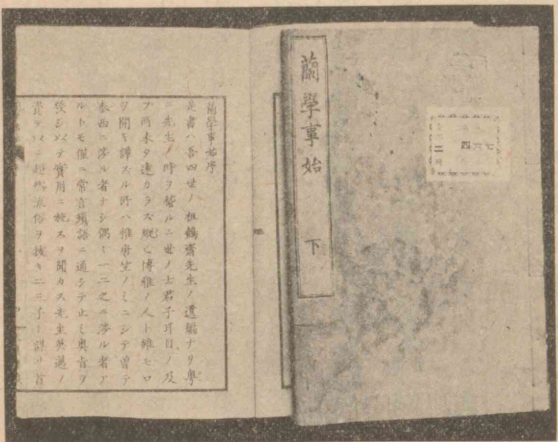
連城の壁
惠王之珠、光能
照乘、和氏之
璧、價重、連城
(成語考)

シンネン
オランダ語で精
神の意

多かりし。これらは亦ゆく／＼は解く可き時も出て來ぬべし。先づ符號を附け置くべしとて、丸の中に十文字を引きて記し置きたり。其の頃知らざることをば「響十文字」と名づけたり。毎會いろいろに申し合はせ、考へ案じて、解すべからざる事あれば、其の苦の餘り、それも又「響十文字」「響十文字」と申したりき。然れども、爲すべき事は固より人にあり、成るべきは天にあり。の喩の如くなるべしと、此の如く思を勞し、精を研り、辛苦せしこと一箇月に六七回なり。其の定日は怠りなく、わけもなくして各、相集り、會議して讀み合ひしに、實に「不味者は心」とやらにて、凡そ一年餘も過しぬれば、譯語も漸く増し、讀むに隨ひ自然と彼の國の事態も了解するやうにて、後々は其の章句の疎あまき所は、一日に十行も、其の餘も、格別の勞苦なく解し得るやうになりたり。尤も毎春參向の通詞どもへも聞き糺せしこともあり。又其の間には解屍の事もあり、獸畜を解

きて見合はせし事も度々なりき。

此の會業怠らずして勤めたりし中、次第に同臭の人も相加り寄りつどふことなりしが、各志す所ありて一様ならず。翁は一たび



を種々様々に考へ直せし事、四年の間に草稿は十一度認めかへて

蘭學事始
 彼の國の解剖の書を得、直ちに實驗し、東西千古の差あることを知り、明らめ、治療の實用にも立て、世の醫家の業にも發明ある種にもなしたく、一日もはやく此の一部を用立つやうになし見たしと志を起せし事、ゆ本、他に望む所もなく、一日會して解する所は、其の夜翻譯して草稿を立て、それに就きては、其の譯述の仕方

板下に渡す迄に至り、遂に解體新書翻譯の業成就したり。
 抑、江戸にて此の學を創業して、腑分ふわけといひ古りしことを新に解體と譯名し、且社中にて誰いふとなく蘭學といへる新名を首唱し、日本國中の通稱ともなるに至れり。是れ今時の隆盛を致せし嚆矢なり。今を以て考ふれば、是迄二百年來、彼の外科法は傳はりしなれども、直ちに彼の醫書を譯するといふ事は絶えてなかりしが、此の時の創業、不可思議にも、凡そ醫道の大經大本たる身體内景の書にて、これが醫書新譯の起始となりしは、不用意を以て得し所に、實に天意とやいふべき。

〔蘭學事始〕

蘭學事始
 二卷
 作者杉田玄白
 「解體新書」翻譯の苦心及び當時の蘭學興隆の機運を語つたもの

内田魯庵
 文學者
 名は貢
 東京の人
 昭和四年歿
 年六十二

一三 郵便切手と玩具

内田 魯庵

人間には誰れにでも蓄積慾がある。此の慾が強いだだけ高等人

どんな廢物の中
 からでも、人間の生活を豊かにする何物かを發見することが出来る。

種であつて、此の慾から築き上げたのが即ち文明だと云ふ説がある位である。尤も透明な科學的頭腦から見れば、世界に蓄積を値ひしない廢物といふ物は無いのだ。どんな廢物の中からでも、人間の生活を豊かにする何物かを發見することが出来るので、世界に眞の廢物といふものは元來無いのだ。近頃さかしら立つて廢物利用を講釋するものがあるが、廢物の存在を前提するのが既に非科學的だ。

此の點から云ふと蒐集家は豪い。蒐集家の眼には廢物といふものが無い。彼等は何でも蒐集する。月並な引札や、號外や、切符や、名刺や、葉莖はせきの帶紙などには、それ／＼已に専門家があるが、恚ういふ方面の熱心家は、産土の大祓の形代だらうが、旦那寺の佛餉袋だらうが、大掃除の検査濟の札だらうが、何でも關はず貼り込んで了ふ。

月並

先年芳野の櫻とか、月ノ瀬の梅とかいふ天然記念物を、一々疊紙たまがに包んで、證歌まで副へた數百點の蒐集コレクシヨが賣物に出た。其の中に、井手の蛙として小さな蛙を干し固めたのがあつた。長柄の橋の鮑屑井手の蛙の乾物と、よく云ふが、實際に井手の蛙を干し固めた人があるんだから驚く。長柄の橋の鮑屑も、何處からか出て來るかも知れん。

蒐集家には、何でも人が氣附かない意表に出るもの、人をあつと驚かす奇抜なものをと心掛ける共通の癖がある。之れが爲めに、往々奇抜に過ぎ、意表に出て過ぎるものを脊負ひ込んで、内々持て餘しつゝ、誇つてゐることがある。或人が、日本銀行で焼き棄てた紙幣の灰を、手を廻して、やつとの事で手に入れて、紙幣の印刷面が灰となつても歴然ありと讀めるのを得々としてゐたが、灰だから家まで持つて歸るのが容易ならぬ苦心であつた。不覺笑つたら吹き

蒐集家には何でも人が氣附かない意表に出るもの、人をあつと驚かす奇抜なものをと心掛ける共通癖がある。

飛ばして了ふ、一寸でも動かしたら直ぐに形が壞れて了ふで、硝子箱に入れようかどうしようかと、さんぐ首を捻つたといふが、結局吹き飛ばして了つたことであらう。

蒐集家には廢物が無い。何でも集めて見れば趣味を生ずる。人もするものでは面白くないから、人の手を着けないものをと考へ、目を皿にして蒐集物をハントする。自分の干支えとに因んだものとか、自分の職業に關するものとか、角鴟カクテとか、蛙とか、三角なものとか、四角なものとか、青い物とか、赤いものとか、蒐集されてゐる品目を數へ挙げたら數百種どころぢやなからう。兼好法師は、見苦しからぬものは文車の書と塵塚の塵と云つてゐる。兼好時代の塵塚はどんな風流なものであつたか知らぬが、塵塚の塵を見苦しいと思はぬ兼好は、蒐集家の心持を理解して居る。

蒐集の入門は郵便切手と土俗玩具だ。前者は小學時代からそ

目を皿にして蒐集物をハントする。

ろく初める。後者は中學時代からだ。

性質から云ふと郵便切手は知識的で、土俗的玩具は趣味的だ。郵便切手の蒐集は第一に地理的知識を與へる。第二に歴史を教へる。例へば、此の頃の中學生には、布哇が獨立の帝國であつたこ

とを知らないものがある。が、カメハメハの顔の附いた切手は、此の太平洋の英雄を憶ひ出させる。又ナポレオンの顔の切手が數種あるが、服裝に由つて將軍時代、執政官時代、皇帝時代と、那翁の一代を物語つて居る。近くはローマーノ



珍らしき郵便切手

太平洋の英雄を憶ひ出させる。

那翁の一代を物語つて居る。

フ三百年の記念切手の如き、あれをローマーノ朝の最後の榮えとして亡びたかと思ふと、クレムリン宮の畫の附いた切手を見る事が、ツァールの亡朝を読むの感がある。郵便切手は全く地理と歴史との教師である。

之れに反して土俗玩具は、人類學的に民俗研究の資料となつても、直接には何の知識をも與へない。其の代はりには、極めて素朴な形狀や單純な色彩が快い藝術的感興を與へる。以前、越後の五智で賣つたといふ張子の虎や、これも以前江戸の近在の歳の市で賣つたといふ胡粉畫の羽子板の如きは、近頃の畫や彫刻よりも遙かに獨創に富んだ藝術味を有つてゐる。同じく亡びかゝつてゐる、以前の宮詣りの犬張子の如き、餘り見馴れてゐるので、誰れも何とも思つてゐないが、あゝいふ奇怪な、而も能く調子の取れた動物の顔は容易に描けるものではない。

蒐集の世界は大
海原の渺茫とし
て限りなく、千
尋の底の測り知
られないほど無
盡蔵である。

そこで、どうして郵便切手或は土俗玩具から蒐集の門に入るかといふと、二つながら一番手近に得られるし、價も普通のものなら子供の小遣錢ポツトネで足りるからだ。だが、暫らくすると飽きる。少しばかり他の方面を覗くと、直ぐもう郵便切手でも有るまい、玩具でも無からうといふ。が、蒐集の世界は大海原の渺茫として限りなく、千尋の底の測り知られないほど無盡蔵であつて、實は此の二つでさへが、廣く集めて深く究めるのは一生の仕事だ。

郵便切手を集めてゐるものは何萬何千人と限りもないが、一枚以上を貼り込んだアルバムを何冊と持つてゐるものは頗る寥寥だ。古い切手となると、前記のカメハメハの顔の附いた布哇の切手でさへが、此の頃は珍しくなつてゐる。ナポレオンの顔の附いたのを持つてゐる人は何人あるか知らん。新しいのでも、阿弗利加の内地のだとか、印度のプロギンスのだとかになると、容易に

新出ハシリの切手

歐羅巴にはさう
いふ熱心な蒐集
家がザラにあ
る。

得られない。高加索だの、ボスニヤだの、新出ハシリの切手は、外務省か逓信省あたりに來てゐれば來てゐるんだが、一般蒐集家の手に入るにはまだ間がある。が、日本の蒐集家は大人しく手を束ねて待つてゐる。手に入らないものを無理に苦心して手に入れようとする熱心は無い。

ところが歐羅巴では、手を束ねて手に入れる事が出来るやうなものばかり集めてゐるのでは、蒐集家とは云はれない。金力を盡くすはおろか、場合に由れば身體まで投げ出す氣でゐる。郵便切手蒐集の爲めに世界を旅行する者があると云つたら、一寸信じられない氣がするだらうが、歐羅巴にはさういふ熱心な蒐集家がザラにある。切手ばかりの咄ぢや無いが、總べて文明國の品物は、何に由らず都會の中心マハの安樂椅子に坐つてゐても容易に得られるが、得られないのは野蠻地のもだから、蒐集旅行家は常に野蠻地

へ侵入する。獅子や虎をハントするのもキューリオをハントするのと同じ冒険である。

（『貌の舌』）

一四 兩國橋

石川 雅望

石川雅望

小説家、狂歌師

六樹園、宿屋飯

盛等の號あり

江戸の人

天保元年歿

年七十八

ます陰はなし

筑波根のこのも

かにも陰はあ

れど君がみ陰に

ます陰はなし

（古今集）

そこら行きかふ

舟の多かるは、

たゞ柳の葉をこ

き散らしたるが

如し。

大江戸より本所へ渡したる橋を、兩國の橋とぞ呼ぶ。いにしへ此の川よりをちは、下總の國なりければ、しか名づけたりと或人いひき。在五中將の、遠くも來にけるかなと佗び給ひし隅田川は、此の上つ瀬にして、淺草なる大悲者も此の流れより取り上げ奉りけるとぞ。富士の嶺は更なり、ます陰はなしと詠める筑波の山も、手にとるばかり見ゆ。そこら行きかふ船の多かるは、たゞ柳の葉をこき散らしたるが如し。夏の頃は、殊に舟あまた集ひて、絲竹の音川波に響き合ひて、おそろしきまで聞こゆ。げに廣き都の中にも、

なぞらふべき所だになく、こよなう賑はしきわたりになん。

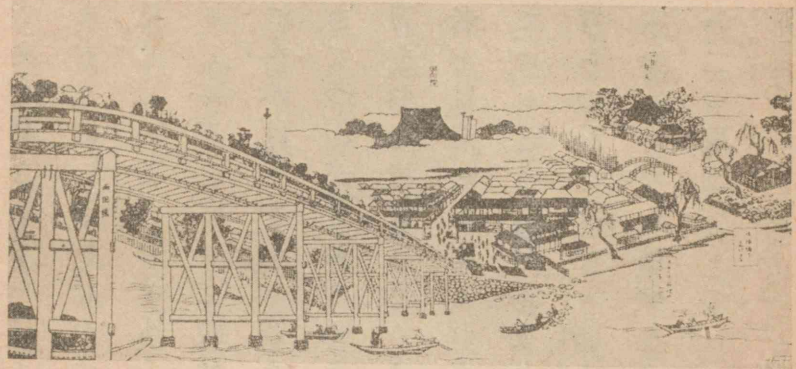
川づらには、菘を編みて隔ての垣となし、簀子だつ物あまた並べて、いこふ人ごとに茶をもてあきなふめり。又同じつらなる假家つくりて、小弓の射場設けて營みとするものもあり。髪つかぬる家、舟貸す家、もちひくだもの、酒賣る軒など、所狭きまで立ち並びたり。すべて名高きあき人の家々は、かぞへ盡くすべうもあらねば、うちおきていはず。

此の大路の中に、菰簾かけ假家つくりて、外の方にあやしき繪をかきてかゝげたるあり。肩ぬぎたる男の、戸口に立ちて、口に手をあて、聲高く呼ばひいへるは、こは丹波の國なる奥山にて捕へつる山あらししてふ獸なり。世に稀有のものなり。前代未聞、又たくひあらじ。家づとによき物語の種ぞ。見たらん後に錢おこしね。と聲かるゝばかりのゝしる様は、鼯鼠の大きなるを捕へて、斯う誇

汝が名はいはじ
荒熊の住むてふ
山のしはせ山實
めて問ふとも汝
が名はのらじ
(萬葉集)

らしげにはいふなりけり。その隣も同じすぢなる假家つくりて、薄衣被ぎたる女子を高く所に据ゑて、うしろには白き青き紙を隔て張りたる明障子を立てつ。添ひゐたる男の扇さかさまにとりて、まづしはぶきを先きにたて、見る人に向ひていへらく、此の女子こそ、越の國のなにかしの村なる狩人の子なれ。殺生の罪の子に報い侍りて、かうあやしき身とは生れにたり。されば十が一つ罪障の消え失せなんよすがともなれとて、こたび率て來て、普く人に見せ奉るなり。とて、かの薄衣をとりのけつれば、げにいひしに違はず、顔より手足まで、一面に黒き毛生ひ續きて、目鼻のつき所さへわかたず。熊女と名づけつるも理にこそと、人々うちまもりあざむ。「かゝるかたはにさへ生れたるを、かゝやかしう人集めて見することよ。かの女いかに佗しとや思ふらん。汝が名はいはじ」とうちたはぶれて出でぬ。

また高きあぐらに上りゐて、文机の上には、拍子木のかたしをおき、古き世の軍物語をまねびいふ。まことにや偽にや、おのが目に見しごと語りなすもをかし。片つ方に人あまた集ひ立てる所あり。何ぞと寄りて覗けば、黒き箱二つ並べ、これに大きな太刀二つをかけ置きつ。若き男の裾ひき上げて、襷結ひたるが、高足駄穿きて、ついがさねのやうなるもの、二つ重ねたる上に乗りて、この太刀を引き抜き、さま／＼に打ち振りて、とみに鞘に納めなどす。從者と見えたる男、これも襟ひき結ひて、これは今少し短き刀を抜き、てぬしとうち合ふまねをす。さてかの人のいへるは、「かゝる太刀打ちのわざは、たゞ諸人の目を喜ばしめんわざなり。まこと我が家のいとなみは、薬ひさぐ業にこそあれ。とて、さゝやかなる紙づつみ二つ取出て、この一つは反魂丹といひて、家に傳へたる良薬なり。疔蛇のやまひ、あるは吐きくだしのやまひ、舟やまひ、酒やまひ、いづ



江戸時代の橋

れに用ゐても頼にしるしあり。又こなたなるは、齒をみがく薬なり。この薬蟲齒を癒やし、口の中のくさき香を除く。齒を白くせんことは、殊に速かなり。などいひつゝ、錢一つを、かの薬もてみかくに、十日の月の雲間を出づるがごと照り輝きて見ゆ。みな人おのがじし求めつゝ去ぬ。

こなたなる葎のかこひの中には、乞食の頭巾着たるが、扇を襟のあたりにさして、上中下の人の上を、面白くまねび語る。うしろの方に、若き女三四人並びゐて、かい弾き歌ふ。とばかりありて、錢求むと

つれなしづくり
て、錢もやらで
出でて行く。



の兩國橋

て、弾きさし立ちて、小さき籠を人の胸乳のあたりへもて來て振り動かす。つれなしづくりて、錢もやらで出でて行く人あるを、かの乞食見て、權兵衛の尉きたなし。まさなうも後を見せ給ふか。馬かへされよ。をう〜。と呼ぶに、皆人笑ふさて、筐なる錢かぞへ見て、あなうれし、百ばかり集まりて侍り。いみじき御恵みになんなどいひて、かけたる錢一つ取出て、これ御覽ぜさせ給へ。半ばかりになりたり。物惜みし給へる人のかゝるもの取出てたびぬ。これもて歸りて鑄物師にあつらへなば、六七文の錢や費や

さばかりよき子
を持たせ給ひ
て、世のきこえ
面目やおはすら
ん。

さん。あなやうなし。などいひて取り隠しつ。「さてもますかげもなき君達のみかげによりて、飢ゑず寒からず世を營み侍り。常も妻子なるものを教へいさめていへらく、かならず殿ばらの御恵みをあだにな思ひそ。ひとへに親と頼み奉れとこそいひつけ侍りしか。よう思へば、おのれが親と聞こえ奉るからは、君だちの爲めにおのれは子にて侍り。さばかりよき子を持たせ給ひて、世のきこえ面目やおはすらん。などいへば、人また例のと、とよみ笑ふこと限りなし。

また人形を頭より手足まであまたの絲もてつけて、唄ひ物に合はせて、絲引きあやどり使ふを、南京のあやつりと名づけて、むかしよりこゝにて行ふ。をさなきものは、皆これに心よせつゝ、つどひよるめり。柳の橋のかたにそひて、殊に高やかに假家造りたるあり。京くだり某の大夫と、いかめしく旗に書きたり。これも外の

方に繪をあまた書きて掲げ置きつ。入りて見れば、袴をばぬぎて、上ばかり着たるもの三人ばかり、笛鼓打ちはやす。耳もとに聊か鬢の髮残して、頭なごりなう剃り捨てたる翁の、同じごと上ばかり着たるが、見る人にむかひてざればみ囀りいふ。かの大夫、頭に鉢巻といふもの後さまに結びて、手足皆赤き絹におしつゝ、みて、半臂のやうなるもの着て出で來たり。見る人に向ひて、ひざまづき拜して、さて太く長き竹の三丈ばかりもやあらんと見るを、中に立ててあるに、すら／＼と登りて、竹のうらに身をとめて、扇取出て、うちあふぎたるさま、いとやすげなり。竹は右左になびきて、今や落ちなんと、見る人心をのゝき目眩れて危ぶみおもふに、竹を膝にからみて居るさま、常の人の地に坐したらんごとし。さて或は立ち、或は伏し、仰ぎて舞ひ、そばだちて踊る。その様一方ならず。これにさま／＼の名あり。かの翁、笛鼓に合はせて指ざしいふ。その

曲の名は、

達磨大師の座禪の床

野中に立てるひともと杉

唐獅子の洞のいでいり

東山の大の字

梢傳ふ猿まろ

餌落したる山がら

住の江のそりはし

松に這ひたる藤波

こゝらあめり。

猶ほこゝらあめり。さて長く引きはへたる綱の上を、傘さして渡る。長さ紙の上をも渡るに、皆足ぶみを拍子はちしに合はせて踊る。見る人あざみ興ぜざるはなし。事はてぬればしたゝかに太鼓打ちならして、もと見し人は替はりねと呼ぶ。遣戸一つあけて人出だ

しりなる人に
あかゞり踏むな
しりなる子、我
も目はありさき
なる子。

〔神樂歌早歌〕

渡邊十千郎

理學博士

東北帝國大學教

授

本名は萬次郎

自然は之れによつて一層の美を添へ、社寺は之れによつて參詣の衆を加ふ。

すに押しあひて出てもやらず。ほとくしりなる人に輝あかりも踏まれつべし。

〔都の手ぶり〕

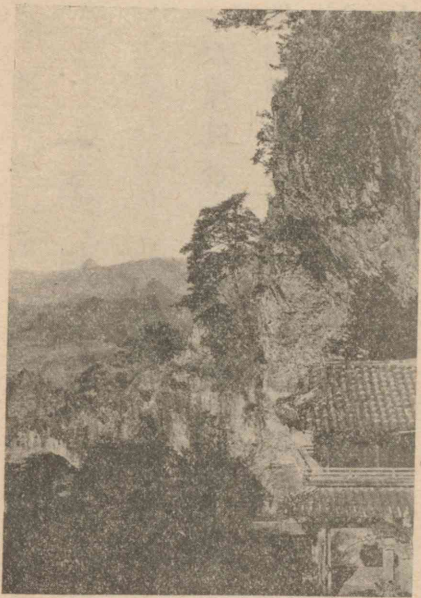
一五 風景と建築

渡邊 十千郎

本邦風景の一大特色は、山川草木の美はしき處殆んど常に神社佛閣の存在を見るにあり。而して之れによつて風景は一層の美を添へ、之れによつて社寺は參詣の衆を加へたり。これ蓋し邦人古來風景の美を讚美するの念に篤く、之れを以て神意の表現となし、之れを崇めて神靈の一部と見做したると、趣味に富める名僧知識が、形勝の地に佛閣を設け、神社を配して、以て一層信仰の念を高めしめむと努めたるが爲めならむ。

先づ試みに所謂日本の名勝に於ける神社佛閣を數へむか。三

景には、松島に瑞巖寺、五大堂鹽釜神社あり、巖島に巖島神社あり、天の橋立に橋立明神及び文殊閣あり、その他富士の淺間神社、筑波の筑波神社、日光の東照宮及び中宮祠、妙義の妙義神社等、數ふるに遑あらず。谿の美しきところには、耶馬溪に羅漢寺あり、寢覺の床に



寺 漢 羅 溪 馬 耶

臨川寺あり、昇仙峽に金櫻神社あり。湖沼の美しきところには、箱根の蘆の湖畔に箱根権現あり、琵琶湖に石山寺、及び長明寺あり。榛名湖に榛名神社あり、赤城の大沼に赤城神社あり。櫻の名所

には、吉野に吉水神社、金峯神社、如意輪堂あり、嵐山に天龍寺あり。

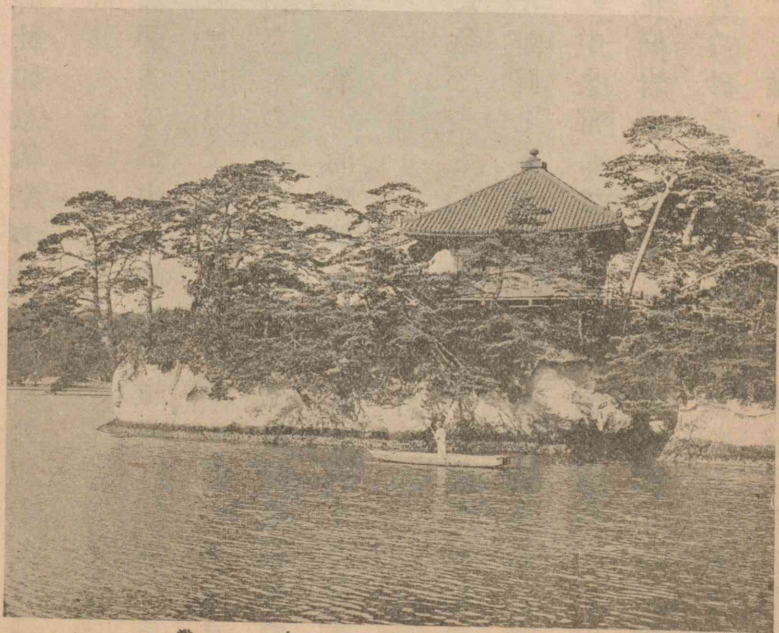
その他一々數ふべからず。

かくの如く、多數の神社佛閣あるが中に、社殿の風景に影響すること最も大いに、殆んど之れに由りて景を成すともいふべきは、まづ安藝の巖島、奈良の春日山、京都の東山一帶等にして、琵琶湖畔の石山寺、北條灣頭の船形觀音、和歌の浦東側の紀三井寺等、また最尤者の一たるに恥ぢず。

巖島は廣島灣の西北部に位し、長さ約四里、幅一里餘、安藝西部の海岸に平行して、西南東北に延長し、其の間一條の水路を夾む。是れ即ち大野の瀬戸にて、其の中央部にて約七八丁、南北兩端に於いて二十丁に過ぎず。全島花崗岩より成りて、老松の翠濃かに、紅葉點綴の美を以て鳴る紅葉谷、白砂青松の景を以て優れたる松の浦等、見るべき景觀少なからずと雖も、本島をして日本三景の一たら

老松の翠濃かに、紅葉點綴の美を以て鳴る紅葉谷、白砂青松の景優れたる松の浦。

しむるは、その西北岸大野の瀬戸に臨める海上に造營せられたる嚴島神社の殿堂、廻廊、華表、燈籠等の配置、よく天然の美と調和して、他に見る可からざる景觀を生じたるが爲めなり。神社は後ろに山を負ひ、前に鏡の如き清波を湛へ、寶殿、拜殿、板殿等、其の基礎悉く水上にあり。之れを廻つて廻廊長さ百四十八間、一間毎に燈籠を設け、百燈



松島五大堂

江水樓閣相掩映す。

老松櫻樹に配するに堂塔伽藍を以てす。

長く連りて波上に映照す。而して有名なる大華表は、更に前方七十間の水上にありて、潮満つれば參詣の船、帆を張つて潜るべく、清波溶漾、廻廊殿堂悉く水上に浮かび、江水樓閣相掩映して妙趣殆んど類を知らず。是れ本島の日本三景中に選ばれし所以にして、其の風景は一に江山自然の形勢を利用して造營したる人工的裝飾美に過ぎずと雖も、その點に於いては寧ろ極致とも稱すべし。

同じく日本三景の中にて、松島の美は殆んど純然たる天然美なり。然も猶ほ松島海岸瑞巖寺の門前に立つて灣頭を眺むれば、左に一島の鐘樓を戴き、双橋を架して陸に接したるあり、その景觀を添ふること幾何なるやを知らず。これ即ち五大堂なり。更に右には數丁の彼方、雄島を連ぬるに渡月橋を以てし、灣上浮かぶるに白帆を以てす。而してこれ皆人工による裝飾美なり。

奈良の東郊春日山一帶の風景も亦老松櫻樹に配するに堂塔伽

奈良七重
芭蕉の句

籃を以てしたる美にして、
奈良七重七堂伽藍八重櫻
と稱へられし程、神社佛閣に富み、石燈、廻廊、廟宇の配置よろしきを得、且つ其の古色掬すべし。

采畫の妙、鏤刻の精、建築の壯、實に海内無双なり。

奈良の春日山に似たる鬱蒼の美中に殿堂の華麗を連れ、更に人工の美を盡くせるものは、日光黒髮山の東照宮にして、采畫の妙、鏤刻の精、建築の壯、實に海内無双なり。されど一切の壯觀悉く老杉の翠に蔽ひ盡くされ、大局の風景に影響すること比較的少なし。

樓閣の丹青翠微を挺んで、磴道五層波瀾に俯す。

同じく鬱蒼の美中に在りても和歌の浦の東側に位する紀三井寺は、樓閣の丹青翠微を挺んで、磴道五層波瀾に俯し、浦の全景を一望の間に收めて、遙かに淡路島の連山を望む。其の景觀の大、風光の美、正に南海第一と稱すべし。

安房の船形觀音は、其の眺望の大に於いて類稀なるのみならず、

懸崖を負ひて山腹に位し、その景觀の中心をなす。磴を登つて南に向へば、鏡が浦の眺望宛ら繪の如く、左に北條館山一帯の海岸を顧み、灣上の二島、鷹の島及び沖の島の宛ら青螺の如きを下瞰しつつ、右には伊豆の大島を遠く蒼海の彼方に望むべく、其の風光の佳麗なること、房總第一と稱すべし。

橋梁も亦屢、風景の裝飾美中の主なる要素をなすものにして、就中古來有名なるは、近江の瀬田の長橋、洛西嵐山の渡月橋、岩國の錦帶橋、松江の大橋等なるべし。近年の架設にかゝる山陰本線餘部あまのこの大鐵橋、濱名湖今切の大鐵橋等はその大を以て有名なれども、風景に於いては、むしろ嵐峽の保津川鐵橋、山北駿河間に於ける酒匂川の鐵橋、野澤附近なる阿賀川の鐵橋等が兩側の翠巒に掩映し、脚下の急湍に調和したるに若かず。また其の形態必ずしも大ならざれども、深峽の崖湍に架して有名なるは、甲州の猿橋にして、

雲埋老樹、雲容變。水拍危巖、水勢驕。

誰識行人斷腸恨。一簑寒雨渡猿橋。

の一句、巧みに山川の景と人工の妙との調和を示せり。

凡そ人工物による風景美は、その國々の傳統的習慣によること大なるを以て、元來同一型なる山川も、之れを配することによりて、忽ち國家的特徴を示すを常とす。既に述べたる社寺橋梁、皆然り。泰西諸國に於いては、假令教會の設はありと雖も、それは概ね人家稠密の街頭に存して、山川の風景に影響すること少なく、朱欄銅屋の五重の塔が、翠綠の間よりその半身を隠見せしめ、或は古色蒼然たる山門の花に埋もれたる光景の如き、之れを見ること能はざるは勿論、橋梁家屋等の配置に於いても、その風光に著しき美觀を添ふる場合少なし。思ふに泰西の美術眼は主として都會の經營と、人工の藝術とに集中せられ、天然の美を味はむとする念に於いて、遙

かに東洋民族に及ばざるには非ざるか。吾人は彼れの人間的なると我れの自然的なると、此の二つの相違が、その風景の特徴の上にも著しく現はれたるを見るなり。

(『風景の科學に據る』)

一六 西湖の美觀

佐々木指月

佐々木指月
著述家、禪學者

大陸的な支那の國土のうちで、西湖は人工的風景の唯一の典型である。此の湖は周回五里餘りの小さな湖であるが、それは人工的努力が、如何なる程度迄自然を凌駕して、自然の與へ得ぬ藝術的感激を與へ得るかを十分に示してゐる。西湖の美觀は八分通り建築の美觀である。湖と周圍の山とは、一切の建築物を一層美しく見せる爲めの背景であるに過ぎない。西湖に遊んで、私は始めて支那が建築の國であることを知つた。

支那の建築は外部から眺むべき建築である、また相當の距離を置いて觀賞すべき建築である。外から眺めて眺める爲めの建築としては、支那の建築程優れて居るのは世界に無い。

支那の建築は、西湖以外で見
る他の美術的建築の場合に於
けると同じく、用材が極めて粗
悪で、裝飾もまことに大まかだ
ある。それ故家の内部に立ち
入つて細かに眺めると、殆んど
豫想した價值を失つてしまふ
場合が多い。支那の建築は外
部から眺むべき建築である、ま
た相當の距離を置いて觀賞す
べき建築である。従つて外か
ら離れて眺める爲めの建築と
しては、支那の建築程優れて居るのは世界に無い。我が國の建築



湖

西



(亭鐘晚は方下)塔峰雷

物は、用材が非常に上質で、そして部分的の意匠と裝飾とが精巧を
極めてある點に於いて、世界に冠
たるものであるが、外觀上の美觀
では到底支那とは競はれない。
要するに日本の建築が内容を重
んずるのに對して、支那の建築は
形式に全力を注いでゐるといふ
べきである。
西湖に遊ぶ人は、湖を距て、南
北の山の上に相對峙してゐる二
つの古塔を見るであらう。南の
塔は雷峰塔であり、北の塔は保叔
塔である。どちらも古代の煉瓦で築かれた塔であるが、近寄つて

見ると、處々破損して、外部や頂上には雑草や名も知れぬ灌木が生えてゐる。雷峰塔は太く短くして鐘を伏せたる如く、保椒塔は細く高く鋭くして槍を立てたる如く、兩々相對して照映の妙を極めてゐる。此の二つの塔がある爲めに、西湖の景色は俄に夢幻的空想力を増して來るが、同時に千年二千年の古き歴史と傳統とを思はせ、敬虔な神祕的印象を旅人の胸に植ゑ付けるのである。

玻璃のやうに透明な水。

湖畔を離れて山路へ分け入ると、さまで高くない此の山を向側へだら／＼と下り切つた處に、清澗禪寺といふ寺がある。其の寺の前には長方形の大きな泉水があつて、玻璃のやうに透明な水中に、三四尺位の大きな鯉が無數に泳いでゐる。泉水の三方を、屋根の續いた平屋の建築物が取巻いてゐる。正面の欄間に「魚樂園」と書いた木彫の大きな額が掛けてある。そして是等の背の低い建築物は、三方から各自の古雅な姿を碧い水の底に映し合つてゐる。

塵外に脱したやうな氣持。

樓門堂塔が蔓を傾けて結構の壯麗を競つてゐる。

る。何たる調和、そして何たる寂であらう。其處に佇んでゐると、此の身は全く塵外に脱したやうな氣持になる。

雲林寺といふは巨刹である。其の廣い／＼境内には幾棟かの樓門堂塔が蔓を傾けて結構の壯麗を競つてゐるが、更に勝れたのは、其の裏山の韜光院といふ寺の庭から脚下に見下した景色である。其處には幾つもの山が、峯を連れ、谷を合はせて、僅かに南面だけが開けてゐる。韜光院へ登る路の兩側には、竹林が續いてゐる。見渡す限りの山々は鬱蒼たる老樹を以て被はれてゐる。畫舫の舳よりも更に反りを打つた樓門や堂の屋根が、山間樹間から現はれてゐる。そしてその邊りを微かな雲煙が去來する。南畫の所謂山景樓閣圖はこゝから創まつたものではなからうか。

しかし、西湖の建築の粹は、何といつても最も多く湖畔の建物の中に現はされてゐる。水と建物との調和、建物と庭園との調和、湖

水と建物との調和、建物と庭園

との調和、湖畔に立ち並ぶ多くの茶館、酒樓、別荘、それらがあらゆる技巧を盡くして輪奐の美を競つてゐる面白さ。

畔に立ち並ぶ多くの茶館、酒樓、別荘、それらがあらゆる技巧を盡くして輪奐の美を競つてゐる面白さ、皆それ／＼に得ならぬものであるが、其の代表的なる建築美は湖の西畔にある劉莊といふ古い邸宅に見出だされるであらう。其處には湖に對つて一つの樓門が建てられてある。そして其の樓門の様式は複雑で珍らしい程精巧である。それが靜かに水に映じてゐる光景は、實になんとも云へないものがある。

西湖の美觀は實に建築の美觀である。

一七 松下村塾

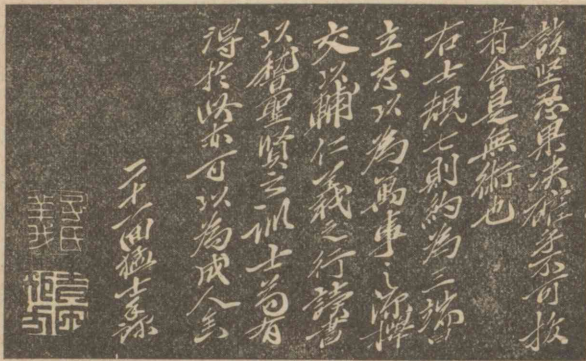
徳富蘇峯

徳富蘇峯
文學者
前國民新聞社長
貴族院議員
名は猪一郎
熊本縣の人
文久三年生

天成の鼓吹者。自ら己れを空しうして他の善を採るを禁ずる能はず。

網常を重んじ彝倫を叙すべきを以てし、狼の目より涙を流さしめたり。

安政元年三月の事



吉田松陰筆蹟(士規七の部一)

神意氣に同化せしむるを禁ずる能はざらしむる力を有しき。これを彼れが特色とす。蹈海の策破れて下田の獄に繋がる、や、獄卒に説くに、自國を尊び、外國を卑しみ、綱常を重んじ、彝倫を叙すべきを以てし、狼の目より涙を流さしめたり。その下田より檻輿江戸に赴き、途三島を經るや、警護の賤夫に向ひて大義を説き、彼等をして、憤勵の氣色に現はれしめたり。その江戸に在りし時、後また送られて長馬野山の獄に投ぜられし時、その感化は同囚者に及び、獄卒に及び、司獄者までも彼れの門人となるに至らしめたり。彼れが在るところ、四圍みな彼れが如き人を生ず。これ何によりて然る

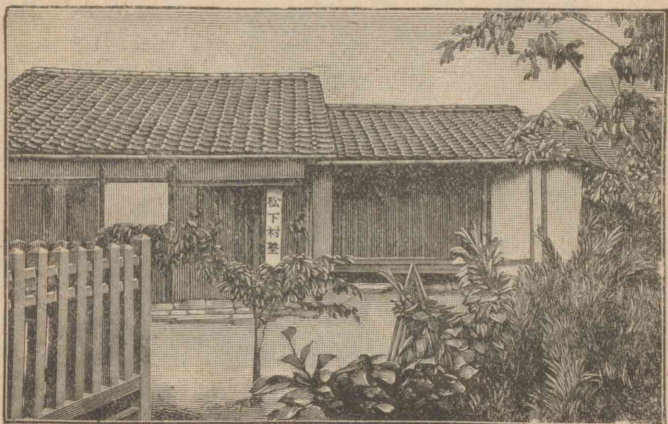
薔薇の在るところ土もまた芳しといふにあらずや。

松下村塾

長門國萩の城下

松下村塾は幕府顛覆の卵を孵化したる保育場の一なり。

流風遺韻人をし



か。薔薇の在るところ土もまた芳しといふにあらずや。

而して彼れが最もその鼓吹者たり感激者たるの特質を顯はしたるは、松下村塾に於いて之れを見る。松下村塾は幕府顛覆の卵を孵化したる保育場の一なり。維新改革の天火を燃やしたる聖壇の一なり。村笑ふ勿れ、その火、燐よりも微かに、その卵、豆よりも小なりしと。赤間關の砲臺は粉にすべし、奇兵隊の名は滅すべし。されど、松下村塾に至つては、獨り當時に偉大なる結果を遺し、のみならず、流風遺韻今に及んで、なほ人をして欽仰、歎美の情

て欽仰、歎美の情を禁ずる能はざらしむるものあり。家に塾居す。

彼れ何を以てかくの如き大感化を及ぼしたるか。曰はくその人に在り、曰はくその時勢に在り、曰はくその教育の目的に在り、曰はくその教育の方法に在り。

を禁ずる能はざらしむるものあるにあらずや。彼れは安政二年十二月、野山の獄より出でて家に塾居せしめられたり。而してその翌年七月に至つて、塾居中更に家學を授くるの許可を得たり。その名義とするところは山鹿流軍學なりと雖も、その實は然らず。彼れは所謂専門的兵法家にあらず。彼れは改革家なり。その教ふるところは改革の精神なり、その講ずるところは改革の偉業なり。

蓋し松陰が自ら松下村塾に直接の關係を有したるは、僅かに安政三年の七月より同五年の十二月までの間にして、即ちその歳月は二年有半に過ぎず。而してこの二年有半の歳月が、未來の日本歴史に於ける千波萬濤の激起點となりたるは何ぞや。彼れ何を以てかくの如き大感化を及ぼしたるか。曰はくその人に在り、曰はくその時勢にあり、曰はくその教育の目的にあり、曰はくその教

白鹿洞の先生
宋の朱熹

橄欖林の夫子
ギリシヤのアリ
ストテレス

彼れは二十七歳
の壯者にして、
要するにこれ白
面の中書生の
み。

精神的爆裂彈。

育の方法に在り。

彼れは精を窮め微に入る白鹿洞の先生にあらず、彼れは宇宙を呑み幽明を窮むる橄欖林の夫子にあらず。彼れは僅かに二十七歳の壯者にして、要するにこれ白面の中書生のみ。而して彼れが實力よりも多くの感化を人に及ぼし、彼れが人物と匹敵する、或る點に於いては寧ろ彼れより優れたる弟子を出だしたるは何故ぞ。「感在、知己」の一句、これを説明して餘りあるべし。

彼れは造化兒の手に成りたる精神的爆裂彈なり。一たび物に觸着すれば、轟然として星火を飛ばす。この時に於いては、物も碎け、彼れもまた碎く。彼れの全體は燃質にて組織せられたり。火氣に接すれば忽ち焰となる。その焰となるや、銀をも鎔かすなり、金をも鎔かすなり、石をも鎔かすなり、瓦をも鎔かすなり。彼れの人に接するや、全心を舉げて接す。彼れの人を愛するや、全力を舉

至誠にして貫か
ざるもの未だこ
れあらず。

隆冬苦寒を凌が
んがために、互
に負載抱擁す。

げて愛す。彼れは往々インスピレーションのために精神的高潮に上る。而してこれを以て他に接し、他を導いてこの高潮に達せしむ。知るべし、彼れが教育の道多岐なした、己れが眞骨頭、大本領を據べて、以て他に及ぼすのみなるを。

彼れの門人を遇する、一に赤心を以てす。「至誠にして貫かざるもの未だこれあらず」とは、彼れが人に接し物を待つ金誠なり。彼れはよく言ふよりも、寧ろよくこれを行へり。而してこの精神を以てその所信を他に施すが故に、その傳道心に至つては、この山を彼處に移すほどの勢力ありしなり。彼れが眼中には敵もなく、味方もなく、たゞ彼れが濟度すべき衆生あるのみ。彼れは社會の寵孫にあらず。彼れが子弟もまた然り。彼等は恰も雪を踏んでアルプの嶺を攀づる旅客の如し。その隆冬、苦寒を凌がんがためには、互に負載抱擁し、自他の體溫によりてその呼吸を保たざるべか

艱難は同情を生じ、同情は恩愛を生ず。
知己の感を以て弟子を陶冶せり、激勵せり。彼れは子弟に先だちて難に殉ぜり。否、子弟のために難に殉ぜり。

豈に徒然として止まんや。

らず。艱難は同情を生じ、同情は恩愛を生ず。先生前に斃れて、弟子後に振ふ。

彼れは知己の感を以て弟子を陶冶せり、激勵せり。彼れは活ける模範となりて、子弟に先だちて難に殉ぜり。否、子弟のために難に殉ぜり。この時に於いては、懦夫と雖もなほ起つべし。況んや平生の素養あるものに於いてをや、況んや恩愛の情、知己の感あるものに於いてをや。彼れはその子弟に向つて、我が如く做せ」といへり。而して做せり。彼等豈に徒然として止まんや。

その時を以てすれば、纔かに二年有半に満たず、その處を以てすれば、たゞ萩城の東郊にある杉氏邸内の八疊の矮屋にして、その特に増築したるものも、別に十疊半の一室を加へたるに過ぎず。而してこの中より無數の活劇及び活劇を演じたる大立物を出だしたる所以のもの、豈にその由るところなくして然るを得んや。世

夫國以二人興以一人亡。
(蘇洵、管仲論)

吉田松陰

幕末の志士
通稱は寅次郎
長州萩の藩士
安政六年刑死
年二十九

至誠天地を感格す。

去年
安政五年

或は一人を以て興り、或は一人を以て亡ぶ。個人の社會に及ぼす勢力もまた輕視すべからざるなり。

〔吉田松陰〕

一八 刑前の書

吉田松陰



吉田松陰

平生の學問淺薄にして、至誠天地を感格する事出來不申、非常の變に立到り申候。嗚々御愁傷も可被遊拜察仕候。

親思ふ心にまさる親心
けふの音づれ何と聞くらん
乍去、去年十月六日差上置き候
書跡より御覽被遊候は、左まで
御愁傷にも及び申間敷と奉存候。

當五月
安政六年五月二
十六日萩城出發
心事一々申上置
き候。

縦横自在に跋扈
す。

尙又當五月出立の節、心事一々申上置き候事につき、今更何も思殘

ト云ふ、申、その上、お聞き申したる御座候、此の度漢文にて相認め候語諸友書も御轉覽可被遊候。幕府正議は凡て御取用無之、夷狄は縦横自在に御府内を跋扈致し候へども、神國未だ地に墜ち不申、上に聖天子あり、下に忠魂義魄充々致し候へば、天下の事も餘り御力御落無之候様奉願候。隨分御氣分御大切に被遊、御長壽を御保可被遊候。以上

吉田松陰筆蹟

候事無御座候。此の度漢文にて相認め候語諸友書も御轉覽可被遊候。幕府正議は凡て御取用無之、夷狄は縦横自在に御府内を跋扈致し候へども、神國未だ地に墜ち不申、上に聖天子あり、下に忠魂義魄充々致し候へば、天下の事も餘り御力御落無之候様奉願候。隨分御氣分御大切に被遊、御長壽を御保可被遊候。以上

安政六年十月二十七日處刑

家大人

松陰の實父杉百台之介

十月二十日認置

家大人膝下

寅二郎百拜

玉丈人

松陰の叔父玉木文之進

家大兄

杉民治

玉丈人膝下

家大兄座下

兩北堂様隨分御氣體御厭ひ專一に奉存候。私被誅候とも首にても葬り呉れ候人あらば、未だ天下の人には棄てられ不申と御一笑奉願候。兒玉小田村久坂の三妹へ、五月に申置き候事忘れぬ様御申聞奉願候。吳々も人を哀まんよりは自ら勤むること肝要に御座候。私首は江戸に葬り、家祭には私平生用ゐ候硯と、去年十月六日呈上仕候書とを神主と被成候様奉願候。硯は己酉の七月か、赤馬關廻浦の節買得せしもの、十年餘著述を助けたる功臣に候。松陰二十一回猛士とのみ御記し奉願候。

湯淺常山

名は元禎
岡山藩儒者
天明元年歿
年七十四

一九 天德寺琵琶に泣く

湯淺常山

佐野天徳寺
豊臣時代の武將
佐野了伯
慶長六年歿
年四十四

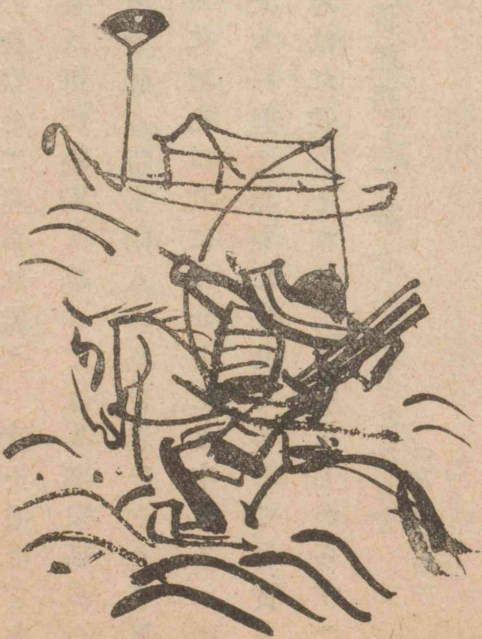
天徳寺あはれが
りて、雨雫と泣
きけり。

天徳寺また落涙
數行に及べり。

御感涙に咽ばれ
て候。

相州北條の幕下、佐野の城主天徳寺豪健の勇將なりしが、或時琵琶法師を招きて、平家を語らせて聴きけるに、未だ語らぬ先に琵琶法師にいひけるは、某はたゞあはれなる事を聴きたくこそあれ。その心得して語り候へ。といへば、法師「心得候。とて、佐々木四郎高綱が宇治川の先陣を語りけるに、天徳寺あはれがりて、雨雫と泣きけり。さて、今一曲前の如くあはれなることを聴きたし。といへば、那須與市宗高が扇の的を語りけるに、平家半ばより、天徳寺また落涙數行に及べり。後日に、家臣の輩に、過ぎし日の平家はいかゞ聴きつる。といふに、家臣ども、最も面白きことにて候。但し我等ども一つ心得ぬことこそ候へ。前後二曲ともに勇烈なる事にて、あはれなる方は少しも候はぬに、君には御感涙に咽ばれて候。これはいかゞの事にて候にや。今に不審なる事に、いづれも申し合ひ候。といへば、天徳寺驚きて、只今までは各をたのもしく思ひ候ひしが、今

の一言にて、さて、力を落して候。まづ佐々木が先陣をよく合點して見られ候へ。頼朝、舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ生唆を高綱に賜はりしにあらずや。されば、そのかひもなく、この馬にて宇治川を先陣せずして、人に先をこされなば、必ず討死して再び歸るまじと、頼朝に暇乞して出でける、その志を察して見られよ。あはれならぬことかは。とて、しばく、涙を拭ひつゝ、しばしありて言ひけるは、那須與市も大勢の中より選ばれて、たゞ一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乗り入れて的に



諸臣皆迷惑して
辭なかりし。

むかふに至るまで、源平兩家鳴りを靜めてこれを見物するに、若し射損じなば、身方の名折れたるべし。馬上にて腹かき切つて海に入らんと覺悟したる其の心を察して見られ候へ。武士道ほどあはれなるものは候はず。某は毎に戰場に臨みては、高綱宗高が心にて槍を取り候故、右の平家を聽く時も兩人の心を思ひやりて、落涙に堪へざりき。然るに、各にはあはれになかりしと申さるゝにつけて思ふに、各の武邊はたゞ一旦の勇氣に任せたるにて、眞實より出づるにてはなきやと思はれ候。それにては頼もしからずこそ候へ。と言ひしかば、諸臣皆迷惑して辭なかりしとなり。

〔常山紀談〕

二〇 武藏坊 (川柳)

武藏坊とかく支度に手間がとれ

うたゝねの顔へ一冊屋根を葺き
かみなりをまねて腹掛やつとさせ
米つきに所を聞けば汗をふき



柳川井柄祖の柳川

義貞の勢はあさりを踏みつぶし
風呂敷を解くとかけだす眞桑瓜
名物を食ふが無筆の旅日記
初物が來ると持佛がちんと鳴り
本降になつて出て行く雨やどり
清盛の醫者は裸で脈をとり

寢て居ても團扇のうごく親心
道とへば一度にうごく田植笠
芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり
煮うりやの柱は馬に喰はれけり

かきか動いたと書きたのが
おもしうい

柄井川柳
通稱八右衛門
名は正通
江戸の人
寛政二年歿
年七十三

團扇のうごく親心。
芭蕉は飛び込み
道風は飛びあがり。

能因
平安朝の歌僧
俗名橋永愷

正宗白鳥
文學者
名は忠夫
岡山の人
明治十二年生
上州の三山が手に取る如く見える。

鹽引の切り残されて長閑なり
まな板を煙草の時にけづらせる
釣れますかなどと文王傍により
手紙には狸臺には鯉を載せ
泣くくもよい方を取る形見わけ
わらぢくひ迄は能因氣が附かず

〔誹風柳多留〕

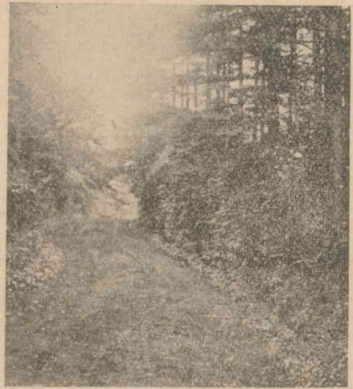
二 輕井澤二日

正宗 白鳥

×日

碓氷峠に登る。上州の三山が手に取る如く見える。神社前の見晴らしのいゝ茶店に憩うてゐると、山羊がやつて来て、私が手にしてゐるステッキに向つて頻りに額を押しつける。不思議に思

あたふた這入つて来た。



峠の道

つてゐると、額の強いのが自慢なんです。」と茶店の主婦はいつた。釜の上の蒸籠からは湯氣があふれてゐた。

「早くしないと蒸れすぎるでないか。」と主婦が出口へ寄つて叱りつけるやうに叫ぶと、袴を穿いた、鼻下に髯を蓄へた神主然たる男があたふた這入つて来て、白の傍へ寄つて、大きな杵を手に取つた。主婦は裾を端折つて杵取をした。名物の力餅がつき上るまで私は見てゐた。

「出来たらすぐに、甘いのを一盆と辛いのを一盆、届けて下さい。」と學生らしい男が、裏口から顔を出していつた。「どうも有難うございます。」と、亭主は額の汗を拭ひながら、苦しげに息をつきながらいつた。

一盆を命ずる氣にはならない。

山野の散歩のみして暫らく人の家の生活を見なかつた私には、そんな光景でも面白く思はれた。しかし私は夫婦に老婆までも加はつて力餅の製造をしてゐるのを見ながら、自分で一盆を命ずる氣にはならないで茶店を出た。そして家の近くの風月で黄味時雨と金鰐とを買つた。

×日

草の葉を動かしてゐる風の色はどうしても秋だ。

朝の間は小雨が降つて寒かつた。正午前から霽れて、珍らしく西風が吹いた。稍暑くなつたが、草の葉を動かしてゐる風の色はどうしても秋だ。私はけふからの確に高原に秋が來たことを感じた。自分の家の庭といふのは可笑しいが、前の草原には今をみなへしが非常に多く咲いてゐる。釣鐘草も多い。純日本風の薊や、吾木香や、その他私が名を知らない草花は何十種となく咲いてゐる。いつまで啼くつもりかと思はれた杜鵑や鶯も、さすがに此

頃は聲を聞かせなくなつた。

さういへばこの間まで、左右の道から聞こえて來た學生達の校歌も、この二三日は聞こえなくなつた。今に別荘の燈火が一つ一つ消えて、この界限も寒い秋風の吹き荒れる寂しい野となるのであらう。

二二 火災と地震

鴨 長 明

鴨長明

鎌倉時代の歌人
建保四年歿
年六十三

安元

高倉天皇御宇の
年號

おのれ物の心を知れりしよりこのかた、四十よそぢあまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、やゝ度々になりぬ。去んぬる安元三年四月二十八日かとよ。風烈しく吹きて静かならざりし夜、戌の時ばかり、都の巽より火出て來て、乾に至る。はてには朱雀門、大極殿、大學寮、民部省などまで移りて、一夜がほどに塵灰となり

吹き迷ふ風に、
とかく移り行く
ほどに、扇をひ
ろげたるが如く
末廣になりぬ。

その中の人うつ
し心あらんや。

七珍萬寶さなが

き。火本は樋口富小路とかや。舞人を宿せる假屋より出て來たりけるとなむ。吹き迷ふ風に、とかく移り行く程に、扇をひろげたるが如く末廣になりぬ。遠き家は



煙にむせびてたふれ伏し、あるは焔にまぐれて忽ちに死しぬ。あるは又わづかに身一つ辛うじて遁れたれども資財を取り出づるに及ばず、七珍萬寶さながら灰燼となりき。その費えいくばく

鴨 長

焔を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪へず吹

明き切られたる焔、飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝ、移り行く。その



火難 (北野天神縁起) 北野神社蔵

ら灰燼となり
に
男
女
死
ぬ
る
者
數
千
人
馬
牛
の
類
邊
際
を
知
ら
ず

元曆二年
後鳥羽天皇の御
宇
第
二
年
に
し
て
文
治
と
改
元
す

ぞ。このたび公卿の家十六焼けたり、まして其の外は數を知らず。すべて都の中、三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛の類邊際を知らず。人の營み皆愚かなる中に、さしも危き京中の家を作るとして財を費やし心を悩ますことは、勝れてあぢきなくぞ待るべき。

また元曆二年のころ、大地震ふること侍りき。そのさま尋常ならず。山は崩れて川を埋み、海はかたぶきて陸をひたせり。土さけて水湧きあがり、巖われて谷にまろび入る。渚こぐ船は浪にただよひ、道行く駒は足の立處をまどはせり。況んや都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、一つとして全からず、或はくづれ、或はたふれぬる間、塵灰立ち上りて、盛んなること煙のごとし。地の震ひ家の破るゝ音、雷に異ならず。家の中に居れば忽ちにうちひしげなん

恐れの中に恐るべかりけるは、たゞ地震なりけりとぞ覺え侍りし

はかなげなる跡なしごとをして遊び侍りし。

とす。走り出づればまた地われ裂く。羽なければ空へもあがるべからず、龍ならねば雲にのぼらんこと難し。恐れの中に恐るべかりけるは、たゞ地震なりけりとぞ覺え侍りし。その中にある武士のひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、築地のおほひの下に小家を作り、はかなげなる跡なしごとをして遊び侍りしが、俄に崩れ埋められて、あとかたなく平にうちひさがれて、二つの眼など、一寸ばかりうち出だされたるを、父母かへて、聲も惜しまず悲しみあひて侍りしこそ、あはれにかなしく見侍りしか。子の愛しみに、猛き武士も恥を忘れけりと覺えて、いとほしく道理かなとぞ見侍りし。

かくおびたしくふることは、暫しにて止みにしかども、その餘波暫しは絶えず、尋常におどろくほどの地震、二三十度ふらぬ日はなし。十日二十日過ぎにしかば、やうく間遠になりて、あるは四

齊衡
文徳天皇御宇の
年號

人皆あぢきなきことをのべて、いさゝか心の濁りもうすらくか
と見えし。

僧契沖
國學者
大阪圓珠庵の住
僧
元祿十四年歿
年六十二

五度、二三度、もしは一日まぜ、二三日に一度など、大かたそのなごり三月ばかりや侍りけん。四大種の中に水火風は常に害をなせど、大地に至りては殊なる變をなさず。

むかし齊衡のころか、とよ大地震ふりて、東大寺の佛の御首落ちなどして、いみじき事ども侍りけれど、猶ほこのたびには如かずとぞ。乃ち人皆あぢきなきことをのべて、いさゝか心の濁りもうすらくか、と見えしほどに、日月かさなり年へにし後は、言の葉にかけていひ出づる人だになし。

〔方丈記〕

二三 夕 雲 雀

夕雲雀芝生に落ちて聲やめば

僧 契 沖

荷田春滿

國學者

山城稻荷山の祠

官

元文元年歿

年六十九

山よりのぼる春の夜の月

荷田春滿

ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の

あとを見るのみ人の道かは

初冬 吹きかへて
秋たつ空に聞きし
よりしるきは風の
冬になる音 東丸

初冬

吹かへて秋たつ空に聞きしよりしるきは風の冬になる音 東丸

蹟筆 春滿

田安宗武

國學者

將軍吉宗の第二

子、贈權大納言

明和八年歿

年五十七

わが宿のそがひにたてるかしの木に

田安宗武

かし鳥來なく頃ははや來ぬ

加藤千蔭

墨田川みの着てくだす筏士に

霞むあしたの雨をこそ知れ

加藤千蔭

國學者

江戸の人

文化五年歿

年七十四

賀茂眞淵

國學者

遠州濱松の人

明和六年歿

年七十三

賀茂眞淵

うらくとのどけき春の心より

にほひ出でたる山櫻花

信濃なるすがのあら野を飛ぶ鷺の

つばさもたわに吹くあらしかな

賀茂祭

知八也夫可美乃民安列鉢氣不奈連波女
宇倍毛父母為乃都可比多知家里

眞淵

蹟筆 眞淵

村田春海

國學者

江戸の人

文化八年歿

年六十六

村田春海

見し世にはたなほざりの一言も

思ひ出づれば懐かしきかな

本居宣長

本居宣長

國學者

伊勢松坂の人

享和元年歿

年七十二

軒くらき春の雨夜のあまそゝぎ

小澤蘆庵

歌人
尾張の人
享和元年歿
年七十九

言の葉は人の心の
聲なれば思ひを述
ぶる外なかりけり

思ふこといはずや
まめや心なき草木
も風に聲たてつな
り。

古にかへらんこと
は皆人のものと心
の道の一筋 蘆菴

上田秋成

國學者、小説家
大阪の人
文化六年歿
年七十六

加納諸平

國學者
安政四年歿
年五十二

小澤蘆庵

小澤蘆庵

小澤蘆庵

小澤蘆庵

あまたも落ちぬ音のさびしさ

惜からぬ命ながらも足乳根の

ある世はかくてあるよしもがな

碎けちる氷と見えて水鳥の

羽風にさわぐ池の月かけ

みぞれふり夜のふけゆけば有馬山

出湯の室に人の音もせぬ

雲かゝるわたのみ中にあら潮を

雨とふらせて鯨うかべり

香川 景樹

加納 諸平

上田 秋成

小澤 蘆庵

小澤 蘆庵

小澤 蘆庵

うづみ火の外に心はなけれども

むかへば見ゆる白鳥の山

歸るべく夜は更けたれど鴨川の

瀨の音は清し月はさやけし

河上花 大井河かへらぬ水にかけ見えて今年も咲ける山ざくらかな

景樹筆蹟

良

寛

霞立つながき春日を子供らと

手まりつきつゝ今日も暮らしつ

月よみの光を待ちてかへりませ

山路は栗のいがの多きに

橘

曙

寛

香川景樹

歌人
號は桂園
鳥取の人
天保十四年歿
年七十六

河上花 大井河かへらぬ水にかけ見えて今年も咲ける山ざくらかな

良寛

歌僧
俗名山本榮藏
越後田雲崎の人
天保二年歿
年七十四

橘曙寛

歌人
越前福井の人
明治元年歿
年五十七

蟻と蟻うなづきあひて何かこと

ありげにはしる西へ東へ

楽しみは珍しき書人にかり

はじめ一ひらひろげたる時

竹の霜うちとけ顔
に頭三つあつめて
かたる友雀かな。
疎竹三禽 曙覽

曙覽筆蹟

大隈言道

歌人

姓は清原
筑前福岡の人
慶應四年歿
年七十一

大隈言道

こたへする聲おもしろみ山彦を

限りもなしによぶ童かな

親なけば子さへ泣くなり世の中の

せんすべなさも何も知らずて

太田垣蓮月尼

女流歌人

名は誠(のぶ)
明治八年歿
年八十五
栗の實ひとつ土
に聲あり

太田垣蓮月

はら／＼と落つる木の葉に交り來て

栗の實ひとつ土に聲あり

二四 日本の眞珠

我が國の眞珠が世界的に知られたのは、極めて最近の事であるが、國內に於いては遠い／＼太古から、特別に貴ばれて種々の裝飾に用ゐられた。眞珠の事の始めて我が文書に現はれたのは『古事記』の神代の卷であらう。神武天皇の御祖父君彥火々出見尊の妃となられた豊玉媛が、尊に別かれて父なる海神の宮に歸られて後、尊に寄せられた歌に、

眞珠の事の始めて我が文書に現はれたのは『古事記』の神代の卷であらう。

赤珠は緒さへ光れど白珠の

君がよそひし貴くありけり

といふのがある。赤珠にも比ぶべき我が生みの子の赤子よりも、眞珠の裝飾を帯びた君の御姿の方が貴いと云つて、夫の尊みことを偲しのばれたのである。神代の貴人が眞珠を愛でて、身邊の裝飾に用ゐた事は、これでも明らかである。

その後、人皇の世となつては、景行天皇が肥前の國で見事な白珠を獲られた事があり、又神功皇后が豊浦とよのうらの津で如意珠を獲られた事がある。白珠も如意珠も共に今の世の眞珠の事であるが、殊に面白いのは允恭天皇の御宇に、明石の浦で大鯰おほなまの腹の中から大きな眞珠を得たといふ『日本紀』の物語である。それは、天皇が即位の十四年に、淡路に狩をされた時であつた。麋鹿ヒツジノカ猿猪ササノカが山谷に充ち群つて居りながら、一匹の獸も獲られないので、怪しんで狩をやめ



眞珠舟と海人

て、占うらなにかけられると、それは島の神の祟りたたかで、明石の海底に世にも珍しい眞珠しらたまがある、それを取つて我が祠ほこらに納めて下さらば、山野の獸を悉く奉らうといふのであつた。そこで、處處の海人共を呼び集めて、明石の海底を探らせられたが、海が深いので底まで潜り入る者が無い。ところが其の中に唯だ一人、男狭磯おのさしといふ剛膽な手練者の海人があつて、腰に繩をつけて、勇んで海底に飛び入つたが、暫らくすると浮かみ出て来て、海底に一つの巨大な鯰あなごが居て、其の周圍がまばゆく光り輝いて居ると云つた。「島の神が所望の玉は必ず其の鯰の腹中に在るのであらう、もう一度潜つて御奉公をせよ。」と激励

浮かみ出でたが、浮かむと同時に息が絶えて、空しき亡骸を浪の上に横たへた。

して、また潜らせたが、皆が繩を凝視めつゝ、堅唾を吞んで待つてゐると、暫らくして合圖があつた。それッといふまゝに、繩を手繰ると、男狭磯は大鯨を抱きかゝへて水面に浮かみ出でたが、浮かむと同時に息が絶えて、空しき亡骸を浪の上に横たへた。やがて鯨の腹を割いて見ると、果たして桃の實位の大眞珠が其の腹の中にあつたので、之れを島の神の祠に納めて、再び狩をすると、夥しい獲物があつたといふのである。

萬葉集にも、當時の人が眞珠を珍重した事を知るべき歌が澤山載せてある。例へば、

海神のもたる白玉見まくほり

千たびぞ告りしかづきする海人

海神の手にまきもたる玉ゆゑに

いその浦わにかづきするかも

海底しづく白玉風吹きて

海は荒るとも取らずはやまじ

等がそれで、是等の歌や傳説によつても、眞珠が神代以來いかばかり我が國人に貴ばれ神に愛でられ、従つて海人等によつて命懸けの冒険が試みられたかが知られる。

本來眞珠は、貝類の肉の中に偶然形成される球形の物體であるが、我が沿海に豊かに産する鯨や、阿古屋貝や、又は到る處の沼や河に棲む諸種の烏貝が、最良質の眞珠を産するので、水邊に居を構へて貝類を嗜食した古代原始の住民は、肉を食はうとして、介殼を開いては、屢々燦然たる光の眼を射るのに驚いたことであらう、そしてそれが度かさなる中に、遂に之れを大切な裝飾に用ゐるやうになつたのであらう。

眞珠がはやくからめて用ゐられたもう一つの理由は、他の寶石

介殼を開いては、屢々燦然たる光の眼を射るのに驚いた。

は、種々の人工を加へて琢いたり削つたりするまでは、謂はゆる璞玉で、殆んど美しい輝きを見せないが、眞珠だけは天然のまゝで、殆んど加工の餘地がない程に完全してゐるためであらう。美しい此の玉が、貝殻の破片や鹿の角などを除き、他のいづれの寶玉よりも遙かに古く用ゐられた事は、全世界に通じての事實で、これは現今南洋や濠洲に住む最未開の種族の風俗や、米國中部あたりの古代人類の墓や塚から發掘さるゝ出土品が、悉く證據立てゝ居るところである。

『古事記』『日本紀』又は『萬葉集』などを見ると、眞珠が極めて古く、「シラタマ」と呼ばれたことが解る。「マタマ」といふのは、漢語の眞珠から來たので、一段後れて用ゐられた稱呼であるが、後には、いつの間にか「シラタマ」「マタマ」の倭讀みが廢れて、漢音の「シンジュ」が通稱の普通名詞となつたのである。

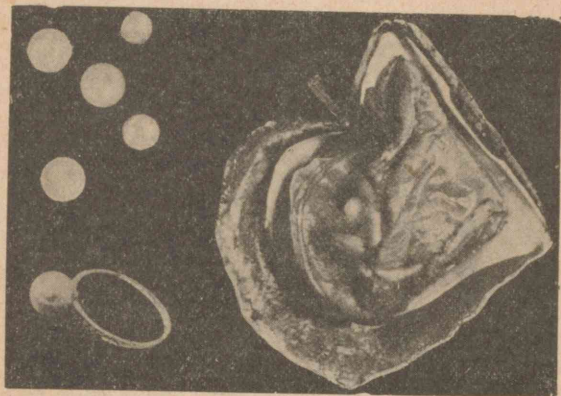
眞珠は人體の裝飾に用ゐられたのみならず、また早くから佛像の裝飾にも用ゐられた。奈良の三月堂の本尊たる不空羅索觀音の白毫及び寶冠には、鱧阿古屋二種の眞珠が豊富に用ゐられてゐる。また用途は違ふが、東大寺や元興寺の建立に際して、地鎮の爲め、他の寶玉と共に眞珠を埋めた事も、最近になつて明らかにされた事實である。

奈良朝以後の文書にも、屢、志摩や對馬の眞珠の賣買された事が記されてゐる。西行法師は、三河國の伊良子に旅した時に、貽貝と云つて食料にも用ゐられる眞珠貝の殻が、堆く積まれたのを見て、阿古屋とるいがひのからをつみおきて

寶のあとを見するなりけり

と詠んで居るが、これは當時の常識がたま／＼歌人の詠に現はれ出たのであらう。

日本の眞珠に關する西洋人の古記録は餘り多く知られてゐないが、最も古いのは元の代に支那に來て政治の最高顧問となつてゐた伊太利のマルコポロが、其の著チバングの島の中に、此の島には薔薇色の大きな眞珠が澤山あつて、死人を火葬する時は、其の口中に一個づつを含ましめる習慣がある。と書いて居るのであらう。つぎには千六百七十年頃、印度に來て居た佛國の旅行家タベルニールが、日本の眞珠に關する噂の聽書をしてゐると、千七百二十七年に出版されたケムフェルの著述の中に、我が國で眞珠を生ずる各種の貝類と其の産地とを報告してゐると位のものであるが、但し後の二人は、日本の眞



眞 珠

タベルニール
(1605-1689)

ケムフェル
(1651-1716)

獨逸の醫者
旅行家

珠の特に優秀なる事と産額の豊富なる事とを知らなかつたやうである。それ故、日本の眞珠を實際歐洲人に紹介したのは、彼等よりは寧ろ徳川時代に於ける九州各地の大名等であつた。彼等が羅馬法王に使節を送る時に、土産とした贈物のうちには、立派な眞珠が澤山あつたといふことで、それはグチカン宮の博物館所藏の文書に立派に明記されて居る。殊に肥前の大村藩主の如きは、親しく法王及び其の從者に、一握づつの眞珠を贈つて彼等を驚かしたといふことであるが、大村灣は今も猶ほ我が國有數の眞珠産地である。

我が國の上代には、珠玉を緒に貫いて頸飾にする風俗があつた。又後には支那の衣冠を眞似て制定した服裝の處々に寶玉を用ゐたので、眞珠の用途も頗る廣かつたが、中世以後は服裝の推移の爲めに、身邊に珠玉を帯びる風が次第に廢つて來た。但し一方、商品

東洋眞珠

川村多實二
理學者
京都帝國大學教授

として、市場に於いて多量に取引された事を考へると、日本の眞珠が我が貿易業者、若しくは支那、朝鮮、和蘭等の商人の手で、盛んに海外に送り出されたことが想像されるが、それにも拘はらず歐洲人が日本の眞珠に關する知識を更に持たなかつたのを見ると、日本の眞珠が商人の手から手に轉賣されて歐洲に達する頃には、印度、波斯、或は南洋諸島の産とすつかり混同されて、たゞ「東洋眞珠」の名の下に、ひとしなみに取扱はれたのであらう。

とにかく量に於いて豊かに、質に於いて優れ、而して早くから特別に珍重された此の國産の寶玉が、最近になつて世界冠絶の名を得たのは、我が國の近世に關する他の類似の事實と相伴つて、頗る愉快な意味の深い事である。

(川村多實二の文に據る)

二五 坦庵と象山

坦庵

江川太郎左衛門
高島秋帆の門人
洋學者、砲術家
安政二年歿
年五十五

象山

佐久間修理
幕末の志士
佐藤一齋及び江
川坦庵の門人
元治元年刺客に
刺さる
年五十四

坪内逍遙

先づ太鼓の音が聞こえる。つゞいて喇叭の聲、「廻れ右へ、一、二、一、二」などといふのが段々近く聞こえる。所は天城山の一部分。葦山の代官江川太郎左衛門英龍(坦庵)が兵式教練を兼ねて、謂はゆる農兵を引率して山獵に出たところである。坦庵の江川太郎左衛門は年齡五十餘歳、打裂羽織、裁袴、極質素な服装、葦山笠を戴き、籠までは騎馬で來たのらしく、鞭を持ち、下官でもあり、門弟でもある二壯士、澤野某、湯ヶ島某を従へ、農兵共に號令しつゝ登つて來る。登り了ると、「とゞまれ」と號令する。一同よろしく佇立する。つゞいて「休め！」の號令につれて、農兵等は肩にしてゐる銃をおろし、それによろしく寛ぐ。太郎左衛門はよき所に床几を立てさせて腰をおろす。澤野と湯ヶ島とは其の左右に蹲踞する。此の途端、下手より太

郎左衛門の家の若黨甲登り來り、太郎左衛門の前に膝ま
づきて、

甲 ハツ、申上

げまする。

江川 何だ？

何事か出

來いたし

たか？



坪内逍遙

甲 只今松代藩の佐久間修理と申さるゝ御仁が、御休息所へ參ら
れました、御面會が願ひたいと申されます。

江川 なに、佐久間修理が？ して汝は何と申した？

甲 只今山上にて御狩獵中と申しましたら、それは存じの上で參
つた。われらは先年暫時御門下に列しをつたる者、此たび公

佐久間修理と申
さるゝ御仁。

して汝は何と申
した。

務を帶び、豆相沿岸の檢分に罷り越したる所、此の山にてお獵
と承り、幸ひの折柄と、お見舞ひ申したと申されます。いか
が計らひませうや？

江川 折角の事だ。苦しうない。こちらへ案内しろ。

甲 はッ。(と行かうとする。)

湯ヶ島先生、失禮ではございますが、佐久間に御對面はいかゞござ
いませうか？ あの仁は、先年



江 失禮にも、先生の御教授振を評
川 して、肝腎の砲術を第二にして、
只山獵々と、毎日のやうに、山
庵 や野を駈け廻るのは、飛脚の修
行にしか相成らんと誹謗いた

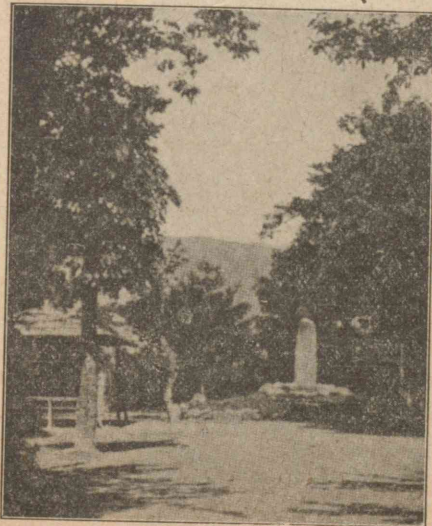
した上、下曾根どのへ、間もなく入門仕つた表裏者ではござい

表裏者

兒戲にひとしい

ませんか？

澤野 そればかりではございません。噂に依りますれば、彼の仁、例の、昨今、品川沖にお築き立て中のお臺場を、偏へに先生の御獻議の如くに申し做し、あのやうな兒戲にひとしいものが、いざとなつて何のお役に立たうぞと、頻つて誹謗いたしまするやに承り及びました。今日の推參も、或は何か悪言の種を探しに參つたのかも圖られません。手前も、御對面は御無用かと存じます。



佐久間象山誕生の地

當今稀有の傑物
高く自ら持して
苟も人に下らぬ

江川

いや、さうでない。あの仁は當今稀有の傑物だ。それだけにまた、高く自ら持して、苟も人に下らぬといふ倨傲の癖も

佐久間はどちら
かといふと、學者
肌で理には至
つて精しいが、
實技には長ぜな
い方だ。

あるのだ。他流試合が修業の第一であるやうに異つた考へを持つてゐる者にぶつつかるのが、何事に附けても有益だ。……こちらへ案内しろ。（と、これにて甲は元來の方へ去る）

佐久間は、どちらかといふと、學者肌で、理には至つて精しいが、實技には長ぜない方だ。が、しかし、傑物には相違ない。……さ、もう一巡訓練をしようぞ。……（と、農兵等に向つて、氣を付け

い！
と、これにて門弟はじめ農兵一同姿勢を正す。是れより、「肩へ銃！云々の號令式の如くあつて、「進め！」「廻れ、右へ！」「停れ！」等いろ／＼あつて、と、彈込めを命じ、「視ひ」を付けさせ、「撃て！」の號令と共に、或一方の凹所へ向けて一齊射撃をさせること、よろしくある。此の途端下手凹所より佐久間修理（象山）、總髮、鬚、齡四十位、打裂羽織、野袴、大小。笠を手に持ち、一人の僕に新式の元込め銃を

擔がせて從へ、先刻の江川の若黨に案内せられて登つて來る。太郎左衛門は斯くと見て、農兵等に「休め！」の號令を下しおきて、佐久間等の近づくを待つ。

佐久 存外にも御疎濶あつろつかに打過ぎましたる段、平ちやうへいに御容赦を願ひます。先づ以て御健勝の體、祝着に存じます。此たび公務を帯び、當地方へ参りましたる所、恰も御山獵と承り、よい折柄と存じ、失禮を顧みず、推参いたしました。

江川 や、これはく、お珍しい。先づ、御貴殿にも御無事で、大慶に存じます。エ、どうやら、此の豆相沿海の防備を御視察とやら承つたが、さやうでござるかな？

佐久 はい、如何にも。先づ浦賀下田を第一といたして。

江川 それは御苦勞な儀はげで、

此の時、佐久間は澤野、湯ヶ島とも舊面識であるらしく、互

舊面識

先づ以て御健勝の體、祝着に存じます。

に會釋することある。

御覽に供した

佐久 さて、御山獵中、御妨げとは存じましたなれど、少々御覽ごらんに供したい物がござつて。

と僕ぼくを顧みて、携へて來た元込め銃を受取り、

エ、此の品は、拙藩の鐵砲鍛冶片井京助と申す者が、多年苦心の末、本年に至り、やうやく成功に及びましたる所の新工夫の鐵砲でござる。實は、此の器の製作には、手前も少なからず心力を勞しましたゆゑ、かたぐい高覽ごらんに供し、御鑑定ごかんていをわづらはず次第でござる。

と銃を江川に見せる。江川受取つて、

江川 ほ、う！如何さま。これは曾て見ませぬ珍しい製作。して效用は？

と佐久間へ返す。佐久間受取つて、

鑑定をわづら

佐久 御覽下され。これは西洋傳來の尋常の鐵砲とは違ひ、彈を込めまするに、一々銃を逆さにいたして込めるやうな迂遠なることはしませいで、すぐにかくの如く（と取扱つて見せて）元込めにいたすのでござる。それゆゑ名附けて「元込め銃」と申し、在來のよりは二三倍も早く彈込めが出来ますから、實戦上の利益は莫大でござる。若しお氣に召さば、獻じたく存じ、持参いたしました。

巧みな製作で便利千萬。

江川 成程。これは巧みな製作で、便利千萬。御工夫の程敬服いたしました。

佐久 時に、先生には、如何おぼしめさる？ 外夷共の跳梁年々次第に甚だしく、就中イギリス夷は、ともすると、専ら此の豆相沿岸に乗り込み來らんとする氣配がござる。然るに此の時に當たり、邊防の爲めに備へ附けられたる大砲は僅かに一百門、夷

其の小銃とても、在來のは迂遠至極の物、迎も實戦の役には立ちません。そこで此の數年來、肝膽を碎き、やうやく斯様な品を工夫し得たのでござるが：

船二艘に當たるにも足らぬ上に、毎砲の彈丸は僅かに十個。中には砲ばかりで、彈の準備の無いのもあると承る。これほど心元ない事はござらん。手前慨歎の餘り、昨年例のベウセルの兵書にもとづき、大砲六門を鑄造せしめ、藩府松代の平野に於いて試發を致し、相當の成績を挙げましてござるが、おそらく本邦にて洋風の太砲を鑄造仕つたのは、これが始めてであらうかと存じます。なれども、外夷共に、萬一にも上陸に及ば、とかく小銃の戦ひとも相成りませう。が、其の小銃とても、在來のは迂遠至極の物、迎も實戦の役には立ちません。そこで此の數年來、肝膽を碎き、やうやく斯様な品を工夫し得たのでござるが：

と昂然として如何にも自慢さうに語りつゞける。湯ヶ島こらへかねた體で、

成程。先づ武器

湯 ア、イヤ、佐久間どの、暫らく。では、在來の鐵砲はすべて迂遠
 至極の物で、逆も實戰の役には立たんと仰せられまするか？
 佐 いかにも。いざとならば、殆んど無用の長物でござりませう。
 湯 なに、無用の長物？ では江川先生の多年の御教練をも、同じ
 く無用の長物と仰せられまするか？
 佐 いや、御教練を無用だとは申さないが、武器は、やがてお改めに
 ならねば叶ひますまい。御教練の方式とても武器が改まれ
 ば、自然とお改めなさらねばならぬこともござりませうて。
 湯 では、先年御批判あつた如く、先生の此の方式は飛脚の修業も
 同然だと仰せられるのでござるか？
 と氣色ばんで詰め寄るを、太郎左衛門制して
 江川 ア、コレ、何事でござる？ お控へなさい。……いや、佐久間ど
 の、お説一々御尤もでござる。成程。先づ武器を完全に致す

を完全に致すこ
 とが當今の急務
 でも御座らう。
 が、いざ實戰と
 なると、何より
 も大切なのはめ
 い／＼の氣魄、
 膽力、次ぎは實
 技の練熟でござ
 る。

殷々聞々在遠空
 密雲不雨日沈紅
 雷公有意蘇天下
 只向山中起龍
 象山

立ち所に撃止め
 る。

事が當今の急務でもござらう。が、いざ實戰となると、何より
 も大切なのはめい／＼の氣魄、膽力、次ぎは實技の練熟でござ
 る。突然に事が生じた場合に、魂が顛倒するやうでは、如何な
 利器も用をなしません。そこで變に處して慌てん稽古が必
 要でござる。同

殷々聞々在遠空密雲
 不雨日沈紅雷公有意蘇
 天下只向山中起龍

佐久間象山筆蹟

じく稽古と申し
 ても、死物の的を
 掛けておいて、よ
 く覗つてから撃
 つばかりの稽古

では、いざといふ時の役には立ちません。だから、拙者はかや
 うに毎々山獵をさせます。どんな猛獸が、いつ、不意に、どこか
 ら飛び出してまゐらうと、立ち所に撃ち止める稽古をさせる

利器も存外無用の長物。

のでござる。此の變に處する覺悟といふよりも練習が積んでをらんと、利器も存外無用の長物となりまするて。全く先生のお説の如く、とかく世の中の事は理窟ばかりでは通りません。利器か鈍器かは、實證を見届けてから定まることとてございませう。

湯 さやうく。それには幸ひの此の山獵。佐久間どののお手練の程を、其の御自慢の元込め銃とやらで拜見いたしたいものでござる。

と嘲弄するやうにいふ。

佐久 (むつとした體で) 折角のお需めだが、手前苦心の此の鐵砲は、御國に仇をなす洋夷共を膺懲するための大切の戎器でござるから、かりそめの遊戲などに使用することは、堅くお斷り申す。

御國に仇をなす洋夷共を膺懲するための大切の戎器。

嘲弄 (あざわらふ)

湯 何と仰せらるゝ？ 然らば、江川先生の多年の此の御教練を遊戲だと仰せらるゝのでござるか？

江川 (制して) あゝ、これ、又しても。佐久間どのに對し、失禮でござるぞ。いや、自分は、佐久間どののと折入つて御談合申したい事があるから、お手前は、其の間、自分に代はり、農兵共をひきつれ西谷のはうでもう一練習試みて下さい。兎ぐらゐは獲られませうぞ。

湯 かしこまりました。

とよろしく佐久間にも會釋することあつて、農兵等をひきゐ、一方の凹所へおりて行く。あとには江川と澤野と佐久間主従だけ残る。澤野は銃を携へてゐる。

江川 先刻、ベウセルの兵書によつて、大砲數門新たに御鑄造になつたとのお話であつたが、それは例の加農砲でござるか？

折入つて御談合申したい。

佐久 いや、加農は只だ一門だけ、別にモルチール(臼砲)を三門、ホウイツツルを二門鑄させました。而うして、加農を地砲、モルチールを天砲、ホウイツツルを人砲と名付け、以後は此の譯名によつて天下に流布さする心得でござる。

(ほんやのち)

江川 砲身には、やはり青銅をお用ゐてござらうな？

佐久 さやうでござる。但し手前は銅百分に錫十一分半を加へました。

しんぼ

江川 いや、それは在來のに比して、大分の進境ではござるが、しかし彼方が例の鋼鐵の大砲を以て攻め寄するとすれば、此方も同じ利器を以て之れに當たらねば勝利は覺束ないこととござる。實は、自分は、此の數年來、専ら此の儀に潛心いたし罷在るので、

佐久 手前とても、それに心附かんでではござらんが、鋼鐵を鎔かす法

専ら此の儀に潛心いたし罷在る。

祕中の祕

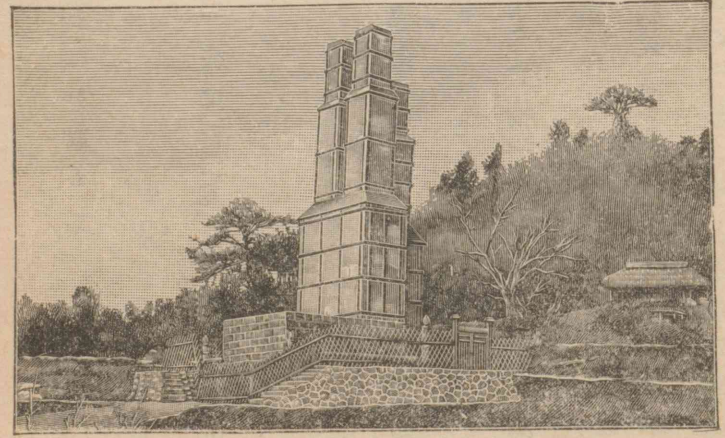
は洋夷が祕中の祕、これを知る道はござらん。

江川 いや、必ずしも無いとは申されん。實は、手前、小規模には、既に屢、成功もいたしてござるが、いまだ……

といひかける此の途端、遠くにて一齊射撃の音が聞こえる。と同時に、関の聲が聞こえる。と澤野は一方の凹所を見やりて、

澤 お、先生、あそこへ兎が何疋も飛び出して参りました。

江川 なるほど。その銃をこれへ。



江川垣庵の反射爐

澤 はッ。

と銃を江川に渡す。江川はそれを取りて

江川 御免！ 御貴殿もいかゞ？

といひながら覗のぞひもあへず一發はなす。佐久間は冷然として見てゐる。

澤 あゝ中たりました。

といふうち、以前の湯ヶ島、大兎を一疋提げて、一方の凹所から登つて来て、

湯

先生、お見事でした。中々大物でございます。あちらでも五六頭しとめました。

此のうちに農兵等も、獲物を携へて、おひく登つて来て、よろしく整列する。

湯ヶ島は先刻の遺恨がまだあるらしく澤野に向つて

覗のぞひもあへず一發はなす。

當てこするやうにいふ。

佐久 (江川に) さすがは多年の御鍛練、あざやかなことでございます。

しかし、獸類は只一二疋で、只ただ管くだ逃げ走るのみのものでござるから、直ちに第二發、第三發とつゞけずともよろござるが、雲霞の如く競またひ来る洋夷共を打ち退けるには、いかゞでござらうか？ 手前は、此の元込めに尙ほ此の上の新意を凝らして、迅發銃とても命名すべき西洋にも類のない鐵砲を製らうと工夫中でござる。いづれまた、程なくそれを携へて御訪問申すでござらう。今日はこれでお暇申す。

新意を凝らす。

江川 さやうでござるか？ 途中とは申しながら、これはまた餘りのお勿々。何のおもてなしもいたさんで。では御機嫌よう。と双方よろしく會釋ありて、佐久間主従は元來の方へ去る。

餘りと申せば高慢な。

湯 先生、餘りと申せば、高慢な、無禮な仁でござる。

江川 水戸の藤田にも次ぐ英物だが、雅量の乏しいのが疵だ。先年は心附かなんだが、今見ると、不思議にも劍難の相が見える。或は其の終はりを全うしないかも知れん。大分日も傾いた。喃、もう一調練して歸らうか？ ……あ、兵は凶器だが、是非に及ばん。戦ひを好めば必ず亡び、戦ひを忘るれば必ず危し。斯うしてお互ひに兵を練るのは、畢竟ずるに、戦ひを以て長く天下の戦ひを止めたいばかりにするのだ。お手前たちも常に此の志を忘れまいぞ。氣を附けい！

戦ひを好めば必ず亡び、戦ひを忘るれば必ず危し。

と號令式の如くよろしくありて先きに立つ。一同肅々として従ふ。 『わがページェント劇』

二六 忠僕と二將軍

小笠原 長 生

小笠原長生
海軍中將、子爵
舊唐津藩主の嗣

私はこゝに、嘉永元年の十五の歳から、大正五年の八十二歳まで、六十八年の間、私の家に盡くしてくれた殊勝なる一老僕について物語らねばならぬ。

老僕は名を山口用助と云つた。弊家の舊領地、肥前唐津在の生れで、私の家に奉公した抑もから死に抵るまで、唯だもう忠實誠實の一點張り、名聞も入らない、利益も入らない、主家の爲めなら命も入らないといふ、南洲翁のいはゆる始末のわるい人間であるが、其の律儀なる事がいつか世に聞こえて、明治四十五年には時の東京

唯だもう忠實誠實の一點張り、南洲翁の謂はゆる始末のわるい人間である。

府知事から木杯一組に賞状を添へて贈られた。またこの一年前には、乃木大將をへこまして大將から「硬骨漢」と褒められ、六年前には、東郷大將から「忠僕」と稱へられたといふ光榮者である。

日露の戦役が終はり、聯合艦隊が解散されて、東郷大將が海軍軍令部長に轉ぜられたのは、明治三十九年の十二月二十日であつた。越えて翌年の四月二十一日の事である。うち頻る歓迎會に疲れ居られる大將を御慰め申さうと考へて、夫人令嬢御同伴で拙宅へ御いでを願つた。私共も他人まぜずの家族ばかりで、萬事儀式ばらぬやうにと注意して、まづ新芽の匂ふ梅林で茶菓を勧め、一休憩して後、竹藪へと御案内した。その途中、家祖を祀つた小祠の側を通りかゝると、丁度祠内の掃除を了へた老僕の用助が、扉を開けて顯はれた。世事に無頓着な彼れも、東郷大將の英名は聞き及ん

でゐるし、今日見えられる事も承知してゐるので、つか／＼と進み寄つて丁寧にお辭儀をして、九州訛りまる出して、「御機嫌よう」とやつた。大將は「はい」と慰勲に會釋を返して後、じつと見詰めて居られたが、私を顧みて、

「鹿兒島ですか。」

と問はれた。

「いや唐津です。彼れは私方の名物男として、面白い經歷を持つて居ります。」と答へると、

「さうですか。永く居るのかな。」

「さやう、約六十年になります。」

「六十年！ そりや永い。」

こんな話で、その場は終はつて、大將の筍掘りとなり、半日の清遊が果て、後、四方山の談話の序に、話頭は端なくも我が老僕の上に及

「さやう、約六十年になります。」
「六十年！ そりや永い。」

んだ。

私が日清戦役から凱旋したのは明治二十八年の八月下旬であつた。久々で家庭の人となつて、氣持よく休んで居ると、夜の十二時頃の事である。襖の外に人の來たけはひがして、

隊長這入つても

いか。

「隊長這入つても可いか？」

と唐津訛カワヅナマリの聲が聞こえた。そのぞんざいな物言といひ、第一私の事を隊長と呼ぶものは、用助より他には無いので、

「かまはん、這入れ。」

と答へると、彼れは何か長い包物を抱へて、せい／＼呼吸を切らせながら這入つて來たが、平素ひらに似ず神妙に襖際に畏まつて居る。私も床の上に起き直つて、こんなに遅くどうしたのだ。それに、せい／＼呼吸を切らして。何か急用でも出來たのか？」と、やゝ詰問

的に尋ねると、

「さうぢやア御座んせん。俺は谷中の御隠居さんここへ往つて來たのだよ。」

といふ。「何も今夜に限つた事ではないぢやないか」といふと、

「俺はどうしても今夜往つて、御隠居様にの、隊長が禁庭きんてい様のため、に、偉い手柄をして戻つて來た事を、申上げなきや濟まないからさ。俺は御隠居様のお役中おやくちゆうも、戦いくさの時も、始終しじゆう側にゐたがの。御隠居様がお國のためを思ひながら朝敵ちふ悪者にされて、江戸にもゐられず、長い間何處どこに御座つたか知れないでの、俺は斯うして觀世音くわんせいおんに御守護をお願ひ申した。」

といひつゝ、彼れは左の掌てのひらを示した。彼れは亡父ちちが明治元年に江戸を脱走したと聞いた時に、亡父の無事を祈るため、日頃信仰する觀世音の御像みがたの前に端座たんざして、掌てのひらに油を湛たへ、燈心を垂らし、それに

その時の焼痕が、今も歴々と掌に遺つてゐて、彼れが誠實を永久に物語る。

賢之進
長生子爵の事

點火して、掌のジリ／＼焼け爛れるを、ぢつと耐へて、この荒行を三日三晩も續けた。その時の焼痕が、今も歴々と掌に遺つてゐて、彼れが誠實を永久に物語つてゐるのである。彼れは今それを示して述懐するのであつた。
「觀世音の御利益は有難いよ。御隠居様は無事で五年目に戻つて御座つた。さうして俺に斯う云うたよ。賢之進に忠義のさせて、禁庭様にお詫びをする」と。其の隊長が、今日立派な手柄をして歸つて來たのだ。早く御隠居様に知らせたいよ。どんなに待つて御座るか知れない。さう思ふと、逆も明日までは待たれないから、用が濟むと出かけて、今戻つたのさ。
彼れはかう云つて持參の包を解くと、中から拵付蠟鞆の大小二口の刀が出て來た。彼れの説明によると、これは幕末擾亂の際に、重大な密使を果たした手柄に對し、亡父より手づから授けられた

もので、機會があつたら私に譲りたいと、久しく考へてゐたのであつたが、今日やうやく其の「機會」を見出だしたといふのであらう、彼れは突然、例のぞんざいな調子で、

「よし遣らう。」

と云つて私を驚かした。私は感極まつて、頓には返事が出來なかつたが、結局有難く受納して、彼れを満足させるより外なかつた。彼れは又私の出征中、雪が降らうが、風が吹かうが、毎夜十二時を合圖に、床を蹴つて起き出でて、ざア／＼と水垢離をとつてから、家祖小祠の靈前に合掌して、曉天まで讀經を續け、皇軍の勝利と私の武運長久とを祈つてゐた。その態度が餘りに熱烈嚴肅なので、それを見た者は、孰れもその心根に泣かされたといふことである。

大將は以上の長物語を飽きもせず、「ウム」「ウム」と云つて、聽いて

いづれもその心根に泣かされた。

居られたが、話が済むと、拱いた腕を解かれて、
「忠僕ぢや。」

力強く頷かれたが、その中には無限の同情がこもつてゐた。私は
改めて、

「如何でせう、極小さく、南無觀世音とお書き下さいませんか。そ
れを助に遣はしたら、どんなにか悦びませうから。」

「僭越ぢやが、此方でよければ書きませう。」

平素揮毫の依頼には、容易に諾と言はない大將が、早速快諾され
たのも、思へば彼れが忠節の餘光であらう。そこで早速お札位の
大きさに揮毫を願ひ、用助を呼び出し、大將の好意を告げて件の名
號を遣はした。彼れは、有難う御座いますと云つて平伏した。大
將は慈愛の籠つた眼で、靜かに見やつて、

「貴方には感服したぢや。折角自重して益、忠義を勵みなさい。」

「唯。」

一問一答に何ともいへぬ至純の人情美が溢れ、満座いづれも頭を
低れて仕舞つた。

それから、明治四十四年の春、私は學習院の御用係兼務を仰付か
つたので、午後は大抵軍令部から、同院の方へ往つて、院長たる乃木
大將の相談相手になつてゐた。其の年の四月、乃木大將は東郷大
將と共に、依仁親王、同妃兩殿下に隨行して英國皇帝の戴冠式に列
し、八月の下旬に歸朝されたが、それから半月程経つての或る日の
事である。私は平素のやうに軍令部に出勤するため、早朝邸を出
て、俥で十町程行くと、乃木大將が、同じく俥で此方へやつて來らる
るのに、バツタリ出會つた。

「こんなに早く、何方へお出でになりますか。」

「貴方のお宅へゆくのだよ。」

「では此處で御用を承りませう。」

「何、君に今別段急用があると云ふ譯ではないのだから、不在でも構はん、ちよつとお宅まで行つて来る。」

「さうですか、それではこれでお別かれして、午後目白でお目に掛かりませう。」

私は強ひて止めもせず、其のまゝ別かれて出勤し、午後になつて、約束通り目白の幹事室で院長に會つた。さうして其の日の要件を片づけて仕舞つてから、一緒に麥湯を飲みながら雑話に移つた。すると院長は妙な顔をして、

「小笠原君、今日は君の宅へ始めて往つて、いや酷い目にあつたよ、どうしてですか。」

「實はね、これを英國から持つて來たので、進呈しようと思つて、そ

れて今朝伺つたぢや。玄關で案内を乞ふと、顔の平たい老人が現はれて、役所はまだ來ん」といふ。「いや君で可い、御主人が御歸宅になつたなら、これを差上げてくれ」と云つて、此の包を出すと、老人更に受取らん。「主人が不在中は誰れからでも、何でも、受取つてはならぬと申付かつて居るから」と、難解の言葉で吃々と斷りよる。「いや俺は乃木ぢや、御主人とは御懇意で、今もつい其處でお目にかゝつて來たのぢやから、決して心配はいらん、受取つてくれ」といふとね、ちつと自分を見てゐたが、いかにも恐縮した容子で、乃木様で御座いますか。わざくお出でになつたのに、誠にお氣の毒で相済みませんが、主人の申付に背く譯には參らん」といふ。「いや取つてくれ。」取らぬ。三十分も押問答をやつたが、仕舞には泣き出しさうになつて、それならかうして下さい、主人が歸つて來て、頂戴しても可いというたら、たとひ夜中でも、

定めし御舊領の者ぢやらうが、藩中かね、それとも村ですか。

何處まで、も伺つて、お預かりして主人に渡します。」と云ふのぢや。理窟が立つちよるので、如何とも仕方がない。すごくと再び其の包を持つて車に乗つたがね。餘り器量はよくなかつたよ。近來彼の位の頑物に出遇つた事がない。實に散々な體さ。いや痛快に頑固な男ぢや。定めし御舊領の者ぢやらうが、藩中かね、それとも村ですか。」

大分閣下の御氣に入つた様である。私は最原の彼れの事であるから、得意になつて、彼れが六十餘年間、三代に仕へて、忠誠一日の如く、親類一門中の褒者である事を物語つた。院長は最初は唯だ愉快げに聽いて居られたが、談話の進むにつれ、次第に昂奮された様子で、やがて瞑目して熱涙を滴らしつゝ、

「天晴れ硬骨漢。小笠原家の寶ぢや。よう可愛がつておやりなさい。今後はもう滅多にさういふ人物は出まい。話を聞くだ

けでも胸がすつきりする。人間の活手本、乃木が敬意を表すると傳へて下さい。」

言ひ了つて、感慨之れを久しうされた。

その後院長は折に觸れては、「用助氏は元氣かね」と尋ねられる。決して呼び捨てにはされない。或る時などは、私が歸りかけてゐるのを呼び止めて、白金巾に包んだ物を手渡しされ、

「これは今日宮中で頂戴して來た菓子ぢやから、用助氏に遣つて下さい。」

と云はれたこともあつた。忠實の徳といふは恐ろしいものであると、つくづく私は思つたのである。

『鐵櫻漫談』に據る

北畠親房

吉野朝の忠臣
大納言 從一位
准三后 正平九
年(三〇)巴蔓 年
六十三
又の年
延元三年(九〇)

顯家

親房の長子 延
元三年(九〇)戰
歿 年二十一
贈右大臣從一位
親王

義良親王 後御
即位あつて後村
上天皇と申す
同じき

男山

京都府(山城國)
石清水八幡宮の
鎮座する山

さてしも

陸奥の皇子
義良親王
向はしめ

顯信

顯家の弟 正平
年中戰歿

國

陸奥國

異母の御兄

尊良親王は越前
金ヶ崎で御自害
護良親王は足利
直義に弑せられ
給ひ宗良親王だ
け御在世

伊豆の崎

石廊崎
伊豆半島の最南
端

二七 秋 霧

北畠親房
顯家
親王
義良親王
男山

又の年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿、また親王を先だて申し、かさねて打上る。海道の國々悉く平ぎぬ。伊勢、伊賀を経て大和に入り、奈良の京になむ着きにける。

それより處々の合戦あまた、互に勝負侍りしに、同じき五月、和泉の國にての戦に、時やいたらざりけむ、忠孝の道、こゝに極まり侍りにき。苔の下にも埋れぬものとは、たゞ徒に名をのみぞ留めし。心憂き世にも侍るかな。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて暫く合戦ありしかど、朝敵忍びて社壇を焼拂ひしより、事成らずして引退く。北國に在りし義貞も度々召されしかど上りあへず、させる事なくて空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。

りなし。

さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子又東へ向はしめたまふべき定めあり。左少將顯信朝臣、中將に轉じ、從三位に敘せられ、陸奥介鎮守府將軍を兼ねて遣さる。東國の官軍悉く彼の節度に從ふべき由を仰せらる。親王は儲の君に立たせ給ふべき旨申し聞かせたまひ、道のほども忝かるべし、國にてはあらはさせたまへ。となむ申されし。異母の御兄もあまたましき。同母の御兄も前東宮恆良親王、成良親王ましき。しに、かく定まり給ひぬるも、天命なれば忝し。

七月の末つ方、伊勢に越えさせ給ひて、神宮にこの由を啓して御船の艤ひし、九月の初、纜を解かれしに、十日頃の事にや、上總の地近くより、空の氣色おどろしく、海上荒くなりしかば、又伊豆の崎といふ方に漂はれ侍りしに、いと波風夥しくなりて、數多の船行

内の海
霞浦

定まら
せ給ひ

合はせ
られ

舊都

京都
光明院おはす

冬
實は八月二十八
日(元元)
戊戌、戊

方知らず侍りけるに、皇子の御船は障りなく伊勢の海に着かせ給ふ。顯信朝臣は元より御船に候ひけり。同じ風のまぎれに、東を指して、常陸の國なる内の海に着きたる船侍りき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて東西に吹き分けらる。末の世には珍らかなる例にぞ侍るべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居も如何と覺えしに、皇大神のとゞめ申さしめ給ひけるなるべし。後に吉野に入らせまし、て、御目の前にて天位を嗣がせ給ひしかば、いとゞ思ひ合はせられて尊くも侍るかな。又常陸はもとより志す方なれば、御志ある輩相計らひて、義兵こはくなりぬ。

さても舊都には、戊寅の年の冬改元して曆應とぞいひける。吉野の宮にはもとの延元の號なれば、國々も思ひの號なり。唐土にはかゝる例多けれど、この國には例なし。されど四年にもな

ぬるがうち

ぬるがうちに
見るをのみやは夢
といはむはかな
き世をも現とは
見ず(壬生忠岑)

仲尼

孔子は「春秋」を
刪正して筆を獲
麟の句に絶つ
た。仲尼は孔子
の字

左大臣
關白左大臣藤原
經忠

りぬるにや。大日本島根は固よりの皇都なり、内侍所、神璽も吉野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。さても八月の十日餘り六日にや、秋霧に冒されさせたまひて、かくれまし、ぬとぞ聞えし。ぬるがうちなる夢の世は、今にはじめぬ習とは知りながら、かざ、目の前なる心地して、老の涙も乾きあへねば、筆の跡さへ滞りぬ。仲尼は獲麟に筆を絶つとあれば、こゝにて止りたけれど、神皇正統の邪なるまじきことわりを申し述べて、素意の末をあらはさまほしくて、強ひて記しつけ侍るなり。

かねて時をも悟らしめたまひけるにや、前の夜より親王をば左大臣の第へ移し奉られて三種の神器を傳へ申さる。後の號をば仰せのまゝにて後醍醐天皇と申す。天下を治めたまふこと二十一年、五十二歳おましましき。

諸皇子
麿坂、忍熊の諸皇子

胎中天皇

應神天皇

御怨念

玉骨はたとひ南山の苔に埋るとも魂魄は常に北關の天を望まんと思ふ若し命を背き義を輕んぜば君も繼體の君に非ず臣も忠烈の臣に非じとて委細に綸言を残されて左の御手に法華經の五の卷を持たせ給ひ右の御手に御劍を按じて八月十六日の丑の刻に遂に崩御なりけり(太平記)

今の帝
後村上天皇

白鳥庫吉
歴史家

昔、仲哀天皇熊襲を攻めさせたまひし時、行宮にて神さりましましき。されど神功皇后程なく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎮められ、胎中天皇の御代に定まりき。この君聖運まし〜しかば、百七十餘年中絶えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前にて日嗣を定めさせたまひぬ。功もなく徳もなき盗人世をとりて、四年餘りが程宸襟を惱まし、御世を過させたまひぬれば、御怨念の末空しく侍りなむや。今の帝亦天照大神よりこの方の正統を受けましましぬれば、この御光に争ひ奉る者やはあるべき。なか〜かくて鎮まるべき時の運とぞ覺え侍る。

〔神皇正統記〕

二八 日本民族論

白鳥庫吉

文學博士
東京帝國大學、
學習院名譽教授
千葉縣の人

有史以前の遼焉たる時代。
西洋史の近代に至るまでは、黄色人種の勢力がなか〜盛んで、次第に亞細亞に居る白哲人を壓倒し、之れを西方に驅逐した。

黄色人と白哲人との競争は、決して近年になつて始まつた事ではない。亞細亞の舊い歴史を見ると、此の競争は天山、葱嶺を境として、有史以前の遼焉たる時代に始まり、それから連綿と引きつゝいて近代に及んで居るのである。其の大體の形勢をいふと、西洋史の近代に至るまでは、黄色人種の勢力がなか〜盛んで、次第に亞細亞に居る白哲人を壓倒し、或は之れを西方に驅逐し、或は其の地に於いて支配して、非常な威力を振つた。嘗に亞細亞に居る白哲人に對してのみならず、進んでは今の歐羅巴に居る白哲人もも侵撃して、或は露西亞を支配し、或は今の匈牙利などに據つて、歐羅巴の西は佛蘭西まで、南は伊太利あたりまでも侵入して居る。そして侵入の結果、今日に残つて居るのは、歐洲の中央に於ける匈牙利人、巴爾幹半島に於ける土耳其人等であるが、現今の匈牙利人はもと烏拉爾山脈の南方に居つたもの、土耳其人はもと天山の近傍

歐洲の天地に立脚地を有するに至つた。

に居つたもので、それが次第に西方へ突進して、かく歐洲の天地に立脚地を有するに至つたのであつた。之れを見ても、如何に黄色人種が一時其の勢力を世界に振つたかを知ることが出来る。

然るに、近世の初めに至り、形勢一變して黄色人の勢力が衰へ始め、白哲人が非常に優勢になつて、次第に黄色人を壓倒するやうな傾向になつて來た。今日亞細亞大陸に於ける南北の黄色人は、いづれも歐洲の強國に支配され、或は制肘されてゐて、完全な獨立を保つて居るものが一つもない。世界大戰の起因であつた巴爾幹半島の問題も、その歴史上の意味を煎じつめると、白哲人が次第に勢力を得て、歐羅巴に居る黄色人を歐羅巴から驅逐せんとする運動の、自然の歴史的結果に外ならぬのである。

歐米の白哲人は、もと東洋人をば、一概に蔑視して、何事に於いても自分等より劣等で、到底自分等と肩を並べることの出來ぬ人間

今日の亞細亞大陸に於ける南北の黄色人は、いづれも歐洲の強國に支配され、或は制肘されてゐて、完全な獨立を保つてゐるものが一つもない。

日本人が歐洲の文明を採用して、駭々と發展進歩して行く有様が、彼等の豫想を裏切つた。

牽強附會。
不見識な議論。

であると思つてゐた。彼等は日本に對しても、やはり同様の考を持つてゐたが、その日本が日清、日露の兩戰役によつて驚くべき武力を顯はし、加之歐洲の文明を採用し利用して、駭々と發展進歩して行く有様が、彼等の豫想を裏切つたので、今迄の反動として、今度は日本を怖れ、妬むやうになつた。そしてやがて黃禍説が唱へられ、遂には日本人を目して蒙古人の如き好戰國民となし、その理由によつて、日本の政治上當然受くべき權利をも妨害するやうな傾向になつて來た。而して又こゝに笑止なのは、日本人の或る一部が之れを聞いて、驚いて、成るべく蒙古人種と思はれたくないと考へたことで、彼等は日本人を歐羅巴人に類した人種であるといひ、或は亞細亞人ではないといふやうな牽強附會の説を吐くやうになつた。しかしながらこれは事實を顧みない誤謬の論で、また不見識な議論である。

日本人は黄色人
であり、モンゴ
ロイドである。

我々日本人が謂はゆる黄色人で、今日の人類學者、言語學者の謂ふモンゴロイドの一種であることは、もはや争ふべからざる事實である。けれども、此のモンゴロイドといふ術語は、單に黄色い顔色をしてゐる人種を名づけたので、我々日本人がモンゴロイドであるといふのは、古へ武勇を以て鳴つた成吉思汗の後裔たる蒙古種族だといふ意味ではない。我々日本人は、黄色い顔をしてゐる人種を總稱したモンゴロイドには屬するけれども、成吉思汗を出した蒙古人と同一種族ではないのである。此の二つを混同して、無闇に之れを怖れるのは不明と云はねばならぬ。而して其の不明な恐怖や嫉妬に焦慮して誤つた辯解をするのは、不見識といはねばならぬ。

日本人はモンゴロイドではあるが、成吉思汗の蒙古人ではない。然らば日本人は事實如何なる人種であるかといふに、一體日本の

日本人種は亞細
亞の南北兩人種
の中間に位する
中間民族であ
る。

人種の本源はまだ不明である。南方に旅行した邦人は、安南、暹羅等、亞細亞南方の黄色人に容貌上、生活上の類似點を發見して、直ちに日本人は南方より來たと論斷する。また朝鮮半島から滿洲、蒙古等に旅行するものは、其等の土地の人間が日本人に類似して居るのを見て、直ちに我々が是等の北方民族と同一人種であるといふ説を立てる。成程漫然と見れば、兩方の民族が、いづれも日本人に似て居るので、かういふ反對説も成り立つのであるが、結局まだ何れとも斷定することが出來ぬのである。併しながら、日本人が南北兩方の人種の何れにも似てゐるといふのは事實で、吾々は日本人種は、亞細亞の南北兩人種の中間に位する中間民族であると思ふ。それ故、北に旅行するものは北方民族といひ、南に旅行するものは南方民族といふのであると思ふ。

一體亞細亞南北の黄色人種が、それ／＼如何なる性質を有する

其の行動は史上に赫灼と輝いてゐる。
勇武を以て四隣に鳴つた。

かといふに、先づ、亞細亞の北方に據つてゐる民族、即ち今日の言語學者や人類學者がウラル、アルタイ民族と稱へるものを見ると、此の民族は概ね歴史上に活動してゐるが、其の中最も有名なのは土耳古人、蒙古人、ツングース及びマジヤール即ち匈牙利人等である。其等の中で特に歴史的に活動したのは蒙古人と土耳古人とで、其の行動は史上に赫灼と輝いて居る。彼等は遊牧を業とした、而して殺伐、勇武を以て四隣に鳴つた民族である。即ち武力を以て他の人種を掠めることが、此の民族の古來の習慣で、侵入奪掠が彼等の民族性であると云つてもよい。近頃歐洲人が日本の勃興を視て黃禍説などを唱へるのは、つまり此の土耳古人や蒙古人が古代に於いて盛んに掠奪を行つた事を想起したので、要するに蒙古人といへば亞細亞人全體を指すものと思ひ謬つたのである。

亞細亞の南方なる黄色人の代表者は、いふまでもなく支那人で

文化の點に於いては黄色人中此の民族の右に出づるものがない。

ある。此の國民は太古から土着で、平和を好み、どこまでも文化を尊ぶ人種である。彼等は北方人種と異つて、戦争は下手であるが、文化の點に於いては、黄色人中此の民族の右に出づるものがない。但し此の民族は、周の時代から二千何百年といふ長い間、殆んど進化發展といふものを見なかつた。それは北方民族の武力的侵害に對し、始終我が既成の風俗、習慣、文物等を守護防衛して、社會組織の崩壞を防がねばならなかつたからで、そのために彼等の生活の總べてが保守的にならざるを得なかつたのである。

かくして亞細亞の北の民族は武に偏し、南の民族は文に偏した。而してそれ〴〵に武と文とに固まつて、保守的の民族となつて了つたのであるが、獨り我が日本民族のみは、此の兩民族の中間に位置し、又地理風土の上に於いて中和を得、また大陸から離れて獨立を全うし得た爲めに、其の發展進歩の上に於いて大陸の兩民族とは

全く違つた徑路を取ることが出来たのである。

元來我が日本民族は大陸から渡つて來たものには相違ないが、亞細亞の南北兩人種が、此の島に渡つて來て混和するやうになつたのは、一般の學者の信じて居る所よりも遙かに、前の事であつた。其の本源はしかとは分らないけれども、有史以前の茫邈たる太古に屬すること、其の頃の日本人は、極めて開けない民族であつたと想像される。こゝには之れを詳しくいふ事を避けるが、例へば、數の數へ方の如きは極めて原始的な遣り方で、其の頃の日本人は片手を用ゐて減法を行ふことを知らず、兩手で加算する以上の計算の出來ない種族であつた。三と六、四と八などいふ倍數の言葉が、皆五十音圖の同行にあることなどが之れを證明する。かく此の原始の日本民族は、極めて幼稚なものではあつたけれども、同時に非常な發展力を持つた民族であつた。彼等は他の國と

本來外國の長を採つて我が短を補ふといふ事は、日本の國是であり、日本人の國民性である。

接觸する毎に、何時でも其の長所を採用して自己の發展に資した。まづ初めに朝鮮の文化を採用した、次いで支那の文化を採用し、又支那を通ほして印度の文化をも採用した。而して最近、西歐との交通が開けると、又々盛んにその文化を採用した。凡そ外國の文化に同化さるゝ事日本人の如きは、世界に殆んど其の例を見ない所で、従つて、今日に於いて日本固有の古風俗がどうであつたかといふ事は容易に知り難い事である。例へば、古來朝廷の儀式に用ゐられた衣冠、束帶は日本固有のもの、の様に思はれて居るが、さうではなくして、實は支那のものである。而して、今日の禮服は西洋のと同じものである。本來外國の長を採つて我が短を補ふといふ事は、日本の國是であり、日本人の國民性である。而して日本がよく外國に同化し、又時代に應じて變化することが出來て、固定保守に陥らなかつた事が、日本の今日ある所以である。外國の文化

に興味を有ち、我れより優れたものがあれば直ちに之れを採らうとするのが、日本民族の特色である。随つて、彼等は極めて平和を好む人種である。これは日本の重寶たる神典を研究してもよく解る事で、我が皇室が慈愛を本源とし、平和を主義とされる事に一點の疑ひもない。高天原を慈悲の本源と尊び、其の反對なる黄泉の國を殺伐の本據として卑しんで居るのを見ても、この事は證明される。それ故大體からいふと、日本人は武よりも寧ろ文を重んずる國民であるといふ事が出来る。此の點は大いに亞細亞の南方民族の代表者たる支那人に似てゐる。けれども日本人は一朝自分の道徳心に訴へて、正義に背いた宥すべからざる行爲と認め、又は一身一家一國の爲めに止むを得ぬと認めた場合には、非常に勇猛なる氣象を發揮する。外國と戦争などをする場合には、平常平和を好む性質が一變して、成吉思汗に率ゐられた蒙古人のやう

文武を兼ね備へた所に我が國民性の特色がある。

に猛烈になる。其の猛烈になる事は古來の歴史、近くは日清、日露の兩役を見てもわかる。而して此の一面だけを見ると、日本人が土耳其人や蒙古人に似て居るので、それで黄禍説なども起こるのであらうが、併し、武のみを日本人の本領と思ふのは全くの誤解である。根本的謬見である。平和を好み文化を愛することも亦同様に日本人の本領で、要するに文武を兼ね備へたところに、我が國民性の特色が存在するのである。約言すれば、日本人は亞細亞の南方民族の文化性を主として、之れに加ふるに北方民族の勇武性を以てし、南北兩民族の長所を調和した民族であるといふ事が出来る。

(白鳥庫吉の文に據る)

西條八十

詩人
早稻田大學教授
明治二十五年東
京市に生れた

二九 曙 光

西條 八十

アジヤの東聖土あり、
天地の正氣あつまりて、
積むや芙蓉の峯の雪、
咲くや萬朶のさくら花。

萬古にわたる皇統は、
空に燦たる天の河、
仰げば深き感恩に、
一億の民たゞ涙。
あゝこの國の雪純く、
曾て異寇に汚されず。

天地の正氣

天地正大氣、粹
然鐘神州、秀
爲不二嶽、巍々
聳二千秋、發
爲萬朶櫻、衆芳
難與儔、正
氣歌
(藤田東湖、正)

寇一冠

正義の熱に咲く

今西歐に日は暮
れて光を呼ばふ
聲すなり
聲すなり

あゝこの國の花赤く、
常に正義の熱に咲く。
君臣の義と父子の愛、
花づなのごとまじはりて、
仁慈と忠と孝悌と、
琴の如くに弾きあそぶ。
今西歐に日は暮れて、
光を呼ばふ聲すなり。
世界は明けんほのぐと、
神の國なる東より。

〔國民詩集〕

純正國語讀本卷五終

昭和十二年七月廿五日印
昭和十二年七月三十日發
昭和十三年一月二十日訂正再版印刷
昭和十三年一月廿五日訂正再版發行

純正國語讀本改訂版

各卷定價金六十錢

編纂者 五十嵐 力

東京市牛込區原町二丁目四十六番地

發行者 山田 謙吉

東京市牛込區榎町七番地

印刷者 五十嵐 良晃



◆發行所 東京市牛込區原町二ノ四六 早稻田圖書出版社

振替東京一三六一五三番

◆關西特約販賣所 大阪市東區北久太郎町四ノ一六 繪柳原書店

